

## 51 野球部の友人二人 ―公文博孝と蒲原弘幸―

野球部の同期の選手の中でも記憶に残る選手が二人いる。一人は土佐高校出身の公文博孝であり、もう一人が佐賀の出身でありながら東京・田園調布高出の蒲原弘幸である。二人とは偶然知り合い、野球担当者としてだけではなく、個人的な友人として、かなり長く接してきた。公文博孝は高知県の名門土佐高校のエース、バッテリーの相棒、大橋勲は慶応に進学した。公文・大橋のバッテリーは四国球界では有名だったらしい。特に土佐高は文武両道の高校として名を挙げていた。公文たちの確か2年先輩に、東大のエース岡村甫（はじめ）投手がいる。

岡村は、神宮で17勝も挙げた。東大野球部の記録という。卒業後、東大教授（土木工学）・工学部長を歴任（現在は名誉教授）している（この項、ウィキペディア）。

これぞ文武両道の人と言える。私たちの世代は東大の岡村の好投を目の当たりにしている。早稲田もかなり敗けていたのではないか。それほど大きくない体で、アンダースローのボールは相当打ちづらかったようだ。公文に岡村の話を知ると、あまりいい顔をしなかった。「あの人は別格だ」との短い言葉で終わるのが常だった。

公文の土佐高の相棒、大橋勲は慶応に進み、順調にレギュラーのポジションを得たが、早稲田の公文は、大いに期待されながらも、登板の機会に恵まれず、3年生になるまで満足な結果が出せなかった。入学後に肩の故障などで存分の投球ができずに伸び悩んでいた。監督の石井連蔵との確執もあったらしい。公文も自分の考えをはっきりと言う人間であり、どこか合わないところがあっても不思議ではない。それに、「早慶6連戦」で大活躍した安藤元博（香川・坂出高）の存在が大きな壁になったのかもしれない。

公文は、4年になって見事にエースとして復活した。4年生の1年間という短い期間であってが、華麗なフォームのサウスポーとしてファンを熱狂させた。公文には、早稲田には珍しく女性ファンが多かったのが特徴である。

野球担当者としては、バックネット裏の情報まで取り込まなければならない。いつも、公文が登板する日になると、若い女性ファンが陣取り、黄色い歓声を上げていた。いつも来る女性の顔は同じで、知り合いのようだと分かった。立教の長嶋茂雄時代を知らないが、六大学野球でこのような女性ファンの歓声をネット裏で聞くのは珍しいことだった。早慶6連戦が行われた昭和35年（1960）秋のリーグ戦でも、特定の早稲田の選手に歓声を上げる女性の一団を見ることはなかった。と、言うよりも球場一杯の観衆が上げる歓声で特定の女性の声は消されていたのだろう。細身で長身の公文の投球フォームは確かに流れるように美しかった。しかも、なかなか良いボールを投げる。特にカーブや速球にはか

なり威力があり他の大学の選手を悩ませていた。徐々に早稲田のエースとしての地位が確立されてきた。「華麗なサウスポー公文」と、ある新聞が彼の美しい投球を表現したことがあった。そうしたことが女性の心を魅了していたのかもしれない。しかし、公文にとって、1年先輩の安藤元博の存在は極めて大きかった。安藤の早慶6連戦での大活躍は、後輩の好投をも消し去るほどの存在感を持っていた。公文は4年生になると、ピッチングも安定し、エースの風格を持ってきた。しかし、公文が好投をしても、早慶6連戦での安藤のピッチングが光り過ぎていささか輝きが薄く、不運としか言いようがなかった。

公文は野球部在籍中、一度ならず二度三度と悩んでいたことがあった。安部球場での練習でも悩みが顔に出ていた時期があった。練習後、冴えない顔をしているので「どうした、困ったことでもあるのか」と声をかけると「今日、時間があるか、後で少し会いたい」と言う。3年生の頃だった。その頃、自分はすでに公文と親しく話をする仲になっていた。夜、高田牧舎で会った。彼の悩みは、石井連蔵との関係だった。石井は直情型の猛烈人間で徹底的に選手を自らの管理下に置いた。いわゆる熱血指導をするタイプ。どちらかと言えば理論型の公文とは合わないようだった。彼は、理論を基にした練習が基本だった。むしろ、一人で黙々と練習をするタイプだった。公文の先輩、東大の岡村が手本だったのかもしれない。公文は、自説を監督に直接ぶつけたこともあると言う。石井の猛烈指導に疑問を感じるようになったからだ。

「俺は安部寮を出されるかもしれない」と公文は苦悩の表情で言った。日頃、物事をはっきりと言う男であったが、何か心に引っ掛かるものを感じた。せっかくレギュラーになって、安部寮にも入れたのに、今の監督との関係は何とも嫌なことだと言った。しかし、この悩みは当事者以外にはなかなか理解が難しい。彼はかなり深刻に悩んでいた。少しでも、自分の話を聞いてもらいたい様子だった。はけ口を求めているのだろう。しかも野球部の中ではなく、部外者と話をしたかったようだ。自分は以前に慶応の練習を見て、石井の指導方式に疑問を持っていた。本音で慶應の話をしたかったが、躊躇してやめた。彼の土佐高時代の相棒、大橋勲は慶應の正捕手の座を獲得していた。当然、大橋から慶応の指導方法や前田監督の性格なども耳に入っていたに違いない。さりげなく、慶應野球部の練習風景を話したが、公文はここで慶應の話聞くのは意外だ、という顔をした。主に公文の話聞くだけで晩飯は終わったが、これも懐かしい思い出である。公文は、一時、安部寮を出たり入ったりしていたが、4年になると俄然奮起して、エースの座をもぎ取った。公文は卒業して、社会人野球の名門日本石油に入社した。日石には代々早稲田野球部の選手が入っていた。公文も恵まれた環境の中で、必ず社会人野球で大活躍をするものと信じていたが大学1、2年生の時と同様、なかなか試合に出なかった。神宮球場のネット裏でいつも公文を応援していた女性は、その後、彼の婚約者となった。

ある時、突然、公文から会社に電話が入った。彼女（神宮教場のネット裏に通っていた人）と結婚をするので、良い宝石店を紹介して欲しいとの依頼だった。彼はクレジット会社に勤務している自分が良い宝石店を知っていると思ったらしい。彼の庶民的な一面を垣間見た気がした。急いで社内情報を集め、信用のある宝石店を紹介してもらって、公文に連絡をした。美人の彼の婚約者は、神宮球場ネット裏席でも目立っていたが、後にミスワールドの日本代表になった人である。

野球部にはもう一人付き合いの長くなった同級生がいた。蒲原弘幸である。蒲原は野球部の人間としては珍しく、教職課程の授業「青年心理学」をとっていた。顔は知っていたが、蒲原とは熱心に話をしたことがなかった。背が大きく、いかつい顔の男はいつも安部球場での練習では特に目立っていた。大きな声と大きな動きが見る人の印象を強くしていた。顔つきといい、言動といい、公文とは好対照の男であった。教室で顔を合わせた時、すぐにその男が「蒲原弘幸」であると分かった。彼のポジションは公文と同じ投手だったが、投球練習の姿をあまり見たことがない。

思い切って、「なぜこんな授業をとっているんだ」と聞くと「俺は高校の教師になりたいんだ」ときっぱりと言う。蒲原は身体こそ大きいですが、ピッチャーとしての評価は公文には及ばなかった。しかし、彼のチームを纏め上げる力や後輩を育てる力には定評があった。彼は神宮での公式戦の時には、3塁コーチャーボックスが定位置であった。大きな身体をのっしのっしとベンチからコーチャーズボックスへ移動する姿には愛嬌があった。彼は2年生以下で構成される新人チームの監督、つまり新人監督も務めていた。この頃から蒲原の指導力には定評があったのだ。彼は野球部の練習があるため、毎週、教職課程の授業に出席することはできなかった。シーズンを問わず野球部の練習が休みになることはなかったからだ。彼は会うたびに授業の進捗状況を聞いてきた。こちら「早稲田スポーツ」の業務でかなり過酷な日程をこなしてはいたが、野球部に比べればまだ楽だ。彼が会うたびに言うことは、「ノートをとっておいてくれよ」ということだった。野球部にも意外と勉強に熱心な男がいるんだと感心していた。

野球部の資料を見ると、彼の経歴は東京の田園調布高卒業となっていたが、本人に聞くと、自分は生粋の佐賀生まれだが、どうしても東京に出たくて、佐賀商業高をやめて東京の高校へ転校したという。この転校についての詳細は口を閉ざしたままだった。郷里の佐賀で、彼は多くの友人に囲まれて野球をやっていたらしい。その実証検分とも言うべき証言をたまたま大学卒業後30年も経って福岡に赴任した時に聞いた。偶然、会社の取引先の佐賀銀行福岡支社に駐在役員として赴任していた指山弘養氏から聞いた話である。自分も単身、福岡に赴任したばかりの頃だった。福岡に常勤し、北九州一円と山口県下関にあ

る支店を見ていた。当然、佐賀市には支店があり、佐賀の地銀佐賀銀行は重要な取引銀行だった。指山さんと会って間もなく、偶然、野球の話になった。指山さんは慶應出身で年齢は自分とほぼ同じだった。そこで、蒲原弘幸の名前が出た。蒲原は佐賀では野球で有名な男だったという。指山さんは佐賀西高から慶應、さらに佐賀銀行に入った由。蒲原とは学校が違うが、なぜ蒲原との接点があったのかと聞いた。指山さんが言うには元々佐賀で活躍していた蒲原は有名であり、上京すると県人会があり、そこでは学校は違うものの心は故郷に帰るのだと言う。つまり、古い友人の一人が蒲原だと言った。これにもびっくり。世間は狭いと思った。特に、指山さんが慶應に入ってからでは時間ができると蒲原に会い、旧交を温めていたと言う。また、早慶戦の時などは時間が合えば、二人は銀座か新宿で杯を挙げたと言った。指山さんに福岡の事務所で会って、しばらくして指山さんは本店に戻り専務に昇格、間隔を空けずに頭取に就任した。次期頭取のうわさは聞いていたが、随分早かった。頭取就任のお祝いに佐賀に出向いたのは当然。指山さんと会うと、金融の話よりも野球の話の方が多かった。指山さんも硬い金融の話よりも学生時代の野球の話の方が楽しいと言っていた。佐賀銀行本店を訪問すると直ぐに頭取の部屋に案内されるのが何とも恐れ多かった。頭取の部屋で指山さんから茶花の話を聞いたことが今でも記憶に残っている。茶道にも長けた人だった。指山さんは蒲原の野球に対する姿勢と情熱が特に良いと言ったことも忘れがたい。

蒲原とは教職の教室で会って以来親しくなった。安部球場でも神宮球場でも彼の大きな身体は目立った。たまに神宮のダッグアウト裏で試合前に会ったりすると、彼は必ず「今日は勝つからな」と言ってダッシュして行くのが常だった。野球部の人間で、昼間の授業に出ている人は珍しかった。よほど早くから、将来の目標を「高校野球の監督」と決めていたに違いない。試験の時も二人は一緒だった。そんなことがあって以降、彼との付き合いは一層強くなった。

蒲原は大学卒業後、最初からの希望通り郷里の佐賀に戻り、母校でもある佐賀商の教職についた。しばらくすると、蒲原は千葉県に現れた。しかも野球の名門千葉商の教師兼監督としての登場だった。どういう事情だったかは知らないが、彼は佐賀県から千葉県の教師に転じたのだった。自分は生まれも育ちも千葉・柏、紆余曲折を経て早稲田へ行ったが住まいも気持ちも純粋な千葉県人である。蒲原の千葉県赴任は嬉しかったが、自分は香港や神戸、大阪などに断続的に赴任していたため、なかなか再会は実現しなかった。最初のきっかけになったのが蒲原の甲子園出場だった。彼が赴任していた県立印旛高校が初の甲子園出場を果たしたのだ。その頃、自分は神戸支店長として赴任していた。会社は神戸・三宮、住まいは西宮市甲東園だった。蒲原の何度目かの甲子園は、印旛高校勤務の時だった。彼が甲子園出場を決めたのを知って、これはお祝いを言い甲子園に行かなければな

らないと思った。自分が住んでいた西宮市甲東園のマンション（自社物、社宅）からは、夜になると西宮球場と甲子園球場の照明がよく見えた。

大会が始まる数日前の夕方、神戸・三宮の会社を早めに出て印旛高校の宿舎へ行った。宿舎は甲子園球場からやや西に寄った西宮と神戸市の境ぐらいの場所だった。折から、印旛高校一行は食事を終えたばかり。不意に訪ねたこともあって、蒲原は驚いた。しかし直ぐに喜びが満面に出た。同級生の訪問で、気持ちが楽になったのかもしれない。「すまん、すまん。直ぐに出るから待っていてくれ」と言って、一度部屋に戻ってから寛いだ姿で玄関に出てきた。その間、食事を終えた選手たちが入れ替わり立ち代り玄関に出て、監督を待つ自分に次々と挨拶をしてゆく。実に礼儀の良い選手たちだった。その中には、後にプロに行った生徒が二人いたそう。部屋から出てきた蒲原は夕食を終わったばかりだったが「飯でも食おう」ということで外へ出た。ちょうど、彼の知り合いの若い新聞記者が訪ねてきて三人となった。若い記者も早稲田出身だという。旅館近くの寿司屋に行き蒲原の甲子園出場を祝った。私たち三人は、あまり酒も飲まずに野球の話に終始していた。蒲原は、この学校は初出場なので卒業生からの寄附金が集まり過ぎた。今日は卒業生の意を込めてお祝いとする、と自己流の理由を付けて彼のご馳走となった。

ところが、試合では奇跡のようなことが起こった。蒲原率いる印旛高校は、初出場にもかかわらず勝ち進んで行く。春の選抜は、各都道府県から1校出場の夏の選手権と違い、出場校が少ない。試合を1回勝つと急に上に行った様な感じになる。神戸赴任中で家族と西宮に住んでいたのも1回戦か2回戦の時、野球の好きな息子を連れて応援に行った。蒲原の印旛高は正攻法で試合を進め勝ち進んでいった。宿舎近くの寿司屋で蒲原が心配していたことは裏腹だった。印旛高校は勢いづき、遂に、決勝戦にまで進んで行った。勝利のたびに勝利監督がテレビに出て感想を喋っていたが、蒲原は言うことが違っていた。「負けて元々だから強いんです。このへんまででしょう」と普通は言わないようなことを堂々とテレビに向かって話した。しかも、決勝相手が甲子園常連で強豪高の大阪PL学園だった。

試合は会社近くの商店街の電気店の前で立ちながらテレビで見た。印旛高はPL相手に堂々と戦い、先取点を挙げた。もしかすると、これは大変なことになるかもしれないと、途中から気持ちが落ち着かなくなった。しかし、さすがPL、終盤になって逆転してしまった。本当に惜しい試合を印旛高は落とした。見ても悔しい試合だった。試合後の監督インタビューで、蒲原は普通の監督はやらない男泣きをした。「生徒たちは精一杯良くやった。全ては自分の采配が悪かった」と言って涙を流したのだった。彼の性格がそのままテレビの画面に出ていた。

昭和 34 年（1959）春（自分と同期）、早稲田野球部に入った選手の中に甲子園の優勝投手がいた。熊本・済々黌高校から来た城戸博である。しかし、春季リーグが終わり、秋季リーグが始まっても城戸博の姿は安部球場にも神宮にもなかった。城戸と一緒に済々黌高からは遊撃手の末次義久が入った。末次は済々黌高の主将で堅実な選手として評価が高く、入学間もない頃からショートの定位置を獲得した。後に公文から聞いた話では、城戸は早い時期に肩を壊してグラウンドから姿を消したと言う。神宮での活躍が期待されていたが城戸はユニフォーム姿を学生野球ファンの前に姿を見せずに野球部から去っていたのである。その城戸と、自分は思わぬところで会ったことがある。入学間もない頃の早朝の授業に駆け込みで階段を上っていた時である。8 時か 8 時半に始まる授業開始前のことである。自分も授業開始に間に合うか否かのギリギリだった。後ろから階段を上り廊下を走ってくる男女がいた。男性の顔はどこかで見た顔であった。思い出すまでにそれほど時間はかからなかった。城戸博投手だった。一緒に走ってきた女子学生は自分たちと同じクラスの人で、城戸とは 1 階で偶然会ったと言っていた。彼女に聞くと、間違いなく城戸だった。野球部の人間がこんな早い授業にどうして出ているのか不思議だった。それは授業開始間際の一瞬の出来事で、城戸と話す時間がなかったのは当然である。

## 52 NHKラジオ「オリンピックアワー」

編集長になったある日、突然体育局から電話があった。自分が出向いたので、多分編集長就任の直後だったかもしれない。教務主任のところへ行くようにと受付の事務員に言われた。町田教務主任（清原健司教授の後任）に会うと「NHKラジオでアマチュアスポーツについての座談会があり早稲田からも学生を出すよう依頼された、問題がなかったら出てほしい」との話。NHKからの要請による番組への出演依頼だった。つまり、NHKのラジオ第2放送で毎週放送している「オリンピックアワー」の次のテーマが“アマチュアスポーツは如何にあるべきか”で、専門家と学生を交えて座談会をやるという。出席者はNHKの解説委員と大学の教授、さらには学生数人を交えて討論をする方式だという。この頃、昭和 39 年（1964）開催の東京オリンピックに向け、いろいろな行事がマスコミを中心に目白押しだった。

折から、東京は初のオリンピック開催（戦前に開催予定の大会は戦争で中止）で大変だった。各種のインフラ整備も東京中で行われていた。早稲田からは、学生水泳界ばかりか世界のトップスイマーであった山中毅を筆頭に数人が出場する予定になっていた。当時、世界はソビエトを初めとする東側諸国が国家でスポーツ選手を管理（ステートアマチュア）して強化に取り組んでいた。これはまさにプロの選手養成のようなものだった。言う

までもなく、オリンピックはアマチュアリズムの象徴のような大会だ。西側諸国にしてみれば、ステートアマチュアと言われる選手の管理体制はオリンピック精神に反しているという強い反対の声が上がっていた。つまりオリンピック精神がぐらつき始めていたのだ。NHKは、このアマチュアリズム崩壊の危機にメスを当てるため、座談会を開きステートアマの賛否についても議論しようと言う試みだった。表面だけを見れば簡単な議論になりそうな感じがしたが、それでは座談会にならない。両面からの白熱した議論を展開しなければ、NHKの立場もなく、座談会自体が成立しない。

体育局からの依頼で断ることもできず、松井とも相談して自分が出ることになった。話が来てから、録音収録までは2週間ぐらいしかなかった。自分は自分の信念に基づいて発言をしようと思って臨んだ。当日は体育局にNHK運動部の人が車で迎えに来ると言う。放送局と言うのはたいしたものと思った。たかが一人の学生のために車で迎えに来るとは、何と贅沢なことだと思った。NHKのある内幸町なら、早稲田からでもそんなに遠いところではない。電車を使って簡単に行ける場所だった。当日、予定の時間に体育局に行き、待っていると、予定通りNHKの人が車で迎えに来た。ところが座談会の収録は本局ではなく別の場所にあるスタジオを使うという。それでも、車は最初、内幸町のNHKに寄り、再度、車で赤坂のスタジオ（借りスタジオ）へ行った。自分にとっては、収録場所は問題ではなくどちらでもよかった。

赤坂のスタジオで、初めて当日のメンバー全員との顔合わせになった。司会はNHKの解説委員で、全国的に顔が知られている平澤和重氏。慶応の池田潔教授、池田さんは幼少時に英国のパブリックスクールに通った英文学者で、「自由と規律」という本を岩波新書から出している人だ。この本は中学時代に読んだ本で、初めてイギリスの中学校の、しかも特殊なとも言える名門中学校の生活を描いていた。もう一人が東大教授（確か「加藤」と言った）で体育学が専門、教育学部の教授だった。他に学生が二人だった。自分の他にもう一人慶応の学生がいた。こちらの名前は忘れてしまった。私たち学生二人を除くと皆さん名前の良く知られた有名人だ。こういう人たちと対等の立場で話をするのかと思うと、それまで持論を展開すればいいと思っていた安易な気持ちに焦りが出てきて、極度の緊張感が襲ってきたのである。

収録の前に行ったことが滑稽だった。打ち合わせの時、NHKのディレクターなる人が出席者をそれぞれ紹介して、今回の番組の趣旨を話した。もちろんテーマは事前に「アマチュアスポーツは如何にあるべきか」と聞かされていたので、頭の中は一応整理されていた。ここでディレクターは「二人の学生にはお互いの持論を述べて頂きたい。ただ、二人の意見が反対でないと議論にならないが…」と困った顔をした。事前に話を聞かれた二

人ともステートアマチュアはオリンピックには合わないという意見だった。ディレクター氏は困った顔のまま、話の成り行きで発言をしてもらうので、自説を強く語ってもらいたい、と強調した。これでは司会者のある種のサジ加減で自説が全く反対になる可能性が高い。何となく腑に落ちないまま、本番に臨んだ。慶応の学生も「困った、困った」を連発していた。平澤和重氏の見事な司会で座談会が進行した。自分は前もって考えていた持論を展開すればよいと観念していた。むしろ、気持ち的には余裕ができたが、目の前の慶応の学生は最後まで腑に落ちない顔のままだった。幸い、自分の発言が慶応の学生よりも早かったので、自由に持論を話すことができた。

二人の大学教授はさすがに話がうまい。特に平澤さんの司会はテレビで見ていた通り落ち着いた話しぶりである。言うなればいつもの平沢節で話を進めてゆく。慶応の池田教授も流石だ。こうした名前が通った人たちと一緒に座談会をやることなど、これまでの学生生活では考えられないことだった。東大で体育学を専攻している教授もオリンピック競技を体育学的に分析して見事な持論を展開した。

私たちはといえば、スポーツ理論の専門家ではないため、気負って話に加わることもなく、平澤さんから向けられたことに応えれば良かった。それでも、自分が日ごろ考えていることの一部は話すことができたのではないかと思っている。オリンピックはアマチュアリズムでなければならない、とする自分の考えは、その後のオリンピックではかなり変わってきたが、当時は正論だった。何としても、「自由と規律」の著者、池田潔さんと同じテーブルで話ができただことが感無量だった。

ラジオの録音はもちろん初めての体験であった。参加者全員がガラスで囲われた狭い部屋に閉じ込められたような格好で入っている。真ん中のテーブルの上の天井から一本のマイクがぶら下がっている。全員がこのマイクに向かって話をするようなものだった。聞き漏らしてはならないと、常に耳をそばだてて発言者の方を見ていなければならなかった。同時に司会の平澤さんがどのように話を進行させてゆくのかも注意して聞いていなければならぬ。まさに神経戦だった。

ふと、ガラスの外側を見ると、若い男がしきりに手を左右に振ったり横に伸ばしたりしている。始めは何のことか分からなかったが、この人がディレクターなのだとその素振りから察せられた。外からの音は全く入ってこないの、一切がこの手振りで表現されているのだった。私たち二人の学生の話が果たして噛み合っていたのかどうか分からないうちに録音は終わった。ただ、平澤さんや池田さんの話だけがスマートに展開された座談会なのだと思うにはいられなかった。さすがに話のプロだった。録音には4、50分もかかったような気がした。ラジオの録音では隣で話している人の顔や手振りは関係がない。ただ声だけ、つまり理論立てが上手く構築されているかどうか成否がかかっているようだ



った。いずれにしても堅い座談会だった。

終わって、ディレクター氏は私たち二人の学生に「ご苦労様でした。これから編集してから放送になる」と言った。放送日の予定も伝えてくれた。私たちは、むしろあっ気にとられた感じだった。実のところ、自分もすっかり緊張していたのだった。録音が終わってからも一緒に座談会に参加していた慶応の学生とも十分に話を交わさないままスタジオを離れてしまった。

放送日は収録から確か、1ヵ月もあとのことだった。夜8時からの「オリンピックアワー」の中で放送された。1時間番組の中に座談会が30分ほど入っていた。自分の声を聞くのも何か不思議な気がしたが、自宅で一人、多少雑音の入る古いラジオで聞いた。収録の現場では、結構気ままに自分の意見を言ったつもりでいたが、実際の放送では二人の学生の声は上手く編集され、余り発言の機会もなかったが、話している部分では互いに五分の形になっていた。歯痒い気持ちが多かった座談会であった。

### 53 オリンピック2回出場の大沼賢治さん

学内の取材でも素晴らしい人たちに会った。その一人が、ウエイトリフティングでオリンピックに2回（メルボルン、ローマ）出場の大沼賢治（山形・鶴岡南高）さんである。会ったのは商学部の事務所だった。その頃、大沼さんは勤務していた日本通運をやめて大学の職員として学内で働いていた。ローマオリンピックが終わって間もない頃だった。体育館事務所の村田光敏主事から「オリンピックに2回出場した人がいるが、もう会ったか」という話がきっかけになって、学内の大沼さんを探した。探すと言っても同じ学内のこと、それほど難しいことではなかった。新聞で、早稲田の大沼賢治という人がオリンピックに出場したということは知っていた。しかし、学内にいるという話は知らなかった。メルボルンとローマ大会に出場しているので、最初にオリンピックに出た時には所属が「日本通運」となっていたはず。それが、なぜ大学の事務所で働いているのが不思議な感じがした。直接、大沼さんに会って話を聞いて初めて事情が分かった。確かに最初のメルボルンオリンピックに出た時には日本通運に勤めていた。メルボルン大会でメダルに手が届きそうな4位になったのが悔しくて、再挑戦することにしたという。そのためには練習環境が良い大学に戻ることが最善だと思ったそうだ。つまり、大学にいれば、練習場もあり、若手の選手たちにも会える。この環境が良いのだと言った。日本通運に勤める前にも大学院にいたという。この間にアメリカのカリフォルニア大学に留学していたとも言った。会って話をすると極めて真面目、しかも論理的にウエイトリフティング（重量挙げ）に挑んでいる様子が分かった。早稲田からは多くのオリンピック選手を輩出しているが、

ウエイトリフティングでの出場は初めてのことだったらしい。しかも大沼さんは連続して2大会に出場を果たした人だった。期待を背負って出場したメルボルン大会で4位入賞は素晴らしい成績だったと思う。次のローマ大会には同じウエイトリフティング部OBの窪田登（後に人間科学部教授）と二人揃って出場している。

大沼さんはオリンピックやウエイトリフティングの話の他にもいろいろな話をしてくれた。早稲田の運動部全般についての話も熱っぽく語ってくれた。とにかく、理にかなった猛練習をやらなければ、国際大会では勝てないというのが持論だった。海外留学経験もあってアメリカのスポーツ事情にも通じていた。この時、早稲田の運動部にも大沼さんのような国際人がいるんだと改めて感心したものだ。大沼さんはスポーツ以外の早稲田学内の事情にも詳しくあった。大沼さんの話は聞いているだけで愉快的な気持ちになった。

一度、大沼さんのトレーニングを大学構内で見たことがある。洋服を着ている時には全くわからなかったが、その筋骨隆々とした身体の凄いこと、凄いこと、並の運動選手の身体ではなかった。その後、個人的な面でも大沼さんにはお世話になった。最初は大沼さんに会って以来、大沼さんとは次第に親しくなった。当時、自分が勤めていたクレジットカード業界には国際化の波が急激に押し寄せ、アメリカの世界的なカード組織（ビザやマスター）に加入することが流行った。その国際組織に加入する仕事に自分が指名された。具体的な仕事として、まず、世界的な国際カードの組織を詳細に調べ、そこへ入会するにはどうすれば良いかという初歩的な仕事だった。しかし、相手はアメリカ、自分の香港駐在程度で得た英語力では歯が立たない。先方の基本規則だけでも優に100ページは超える。頭を抱えていた時に思い出したのが大沼賢治さん。思い切って大学に行き、経緯を話すと、少々の翻訳は夜でもやるよ、との返事。数日後、分厚い英文の書類を大沼さんに手渡した。大沼さんの翻訳が基になって、会社はアメリカの大手カード組織に加入することができた。自分は大沼さんとの仕事をビジネスライクに進めたのはもちろんである。

## 54 五輪金メダリストに渡し損ねた謝礼

### —織田幹雄さんのスポーツ講演の会場で—

いささか恥ずかしく失礼な話を思い出す。

自分が編集長をしていた頃だったので昭和36年（1961）か37年の秋のことである。ちょうど早稲田祭の時期で、「早稲田スポーツ」も参加した。前年、スポーツ関係の展示会を下級生が中心になって商学部かの教室で行い、早稲田祭の雰囲気には慣れていた。

「早稲田スポーツ」は、まだ部の誕生から3年の若い学生の会で大々的な催事を開ける

力を持っていない。振り返ってみると、「早稲田スポーツ」が開いた講演会は単独で行った気がする。創刊して2、3年目の、新聞としては思い切った催事であった。半世紀以上も経ってはっきりしない部分があるが、自分が開会の挨拶をした記憶があり、「早稲田スポーツ」単独で開いたものだったに違いない。

早稲田祭の期間に大隈講堂を会場に「スポーツ講演会」を開催したのである。催事の計画段階ではいろいろな案が出たが「早稲田スポーツ」としては、準備に時間がかからない講演会にしたような気がする。何としても日本陸上界のスーパースターで日本初の五輪金メダル（三段跳）を獲った織田幹雄さんを講師に呼んで話を聞きたいと決まった。当時、私たち「早稲田スポーツ」も大隈講堂で講演会を開くことができるという快挙にある種の興奮を味わっていた。部内でいろいろ議論した末の織田幹雄さんだった。競走部OBで「日本人初のオリンピック金メダリスト」としての名前はつとに知られている。織田さんは当時、朝日新聞運動部長の職にあった。織田幹雄さんが大隈講堂に来てもらえることになれば大変なことになる。正確には記憶していないが、織田さんに講演会の依頼をどのようにして行ったのか、多分、競走部のマネージャー（河原さん）を通じて織田さんに依頼をしたのではなかったか。すでに「早稲田スポーツ」紙上には競走部OBの河野一郎氏も登場しており、何かと競走部OBとの縁もできていた。私たちの同期、競走部の渡辺定恭は自分たちと同じ学年、同じ学部だったが、まだ織田幹雄さんのことを頼むわけではなく4年生のマネージャーに頼んだに違いない。あるいは衆議院議員で大物政治家河野一郎氏の長男・競走部OBの河野洋平氏を通じて話を持ち込んだ可能性も高い。

織田幹雄さんからの「了解」との返事はかなり早かった。「早稲田スポーツ」の部内は忙しくなった。自分が編集長をしていた時なので、自分が指揮を執った。少ない部員を遣り繰りして織田さんを丁重に迎えようと入念な準備を行った。会場は大隈講堂であり、世界の織田さんにとっても母校の大講堂である。十分に相応しい場所であった。部内で心配になったのは、いくら世界の織田幹雄さんといっても、その当時の一般学生が織田さんをどれくらい知っているか、ということだった。2000人近くを収容する大隈講堂に空席が出たのでは講師にも失礼である。大丈夫だろうかと気を揉んでいたが、案ずるより産むがやすし、当日の会場はほぼ満員になった。早稲田の学生は織田幹雄さんを良く知っていたのである。

#### **織田幹雄さんの略歴は以下の通り。**

1905年（明治35）3月30日、広島県海田町出身、1928年（昭和3）アムステルダムオリンピックの三段跳び金メダリスト。「日本人初の金メダリスト」であり、アジア人としても個人初の金メダリストであった。早大商学部卒業。織田の金メダルによって日本陸上は一躍世界の第一線に躍り出たと言われた。なお、三段跳びでは織田、南部忠平、田島直人と3大会連続で金メダルを獲得し

た。織田、南部は同じ早大競走部で活躍をした仲で、終生の友人でもあった。織田は早大競走部時代、主将を務めた（昭和4年）。織田は「陸上の神様」、「日本陸上の父」と呼ばれ、戦後日本の陸上競技を指導した人物である。国際オリンピック委員会（IOC）オリンピック功労賞受賞。文化功労者、東京都名誉都民、朝日新聞運動部部長、早大教授等を務めた。織田幹雄を記念して東京の国立競技場と広島広域公園陸上競技場には「織田ポール」が設置されている。改築されている国立競技場には、「織田ポール」が移設されることが決まっている。晩年は夫妻で神奈川県三浦市油壺に暮らす。その後、藤沢市鵠沼に暮らし、1998年（平成10）12月25日、鎌倉市で死去。享年93。（ウイキペディア）

大隈講堂の講演会に来てもらった頃は、まだ50代後半の華々しい活躍のただ中にいた。瘦躯、端正な印象を持った人であった。織田さんは大隈講堂に颯爽と現われ、颯爽と引き揚げて行った。

定刻少し前に織田幹雄さんが現われ、大隈講堂のステージの横で「早稲田スポーツ」の編集長として織田幹雄さんを迎え挨拶をした。思っていたよりも織田さんは小柄な人だった。しかし、端正な風貌の人で、実際よりも背が高い人のように見えた。きつい感じは全くなく極めて穏やかな人だった。この人が日本で初めてオリンピックで金メダルを取った人かと思うほど運動部特有の態度はなく、話の印象からは極めて紳士だった。鋭い感覚の持ち主であることは無駄のない話の中にも見て取れた。従って、ステージ横での話もすんなりと進んだ。織田さんはいわゆるスマートという言葉がぴったりの人であった。こちらから聞く前に、学生の会が主催する会では謝礼など不要との言葉が出た。その口調が穏やかだったので、聞き流したほどである。織田さんが言うことは、あくまでも外交辞令的なことだと思った。自分は講演が始まる前に、幾ばくかの謝礼を袋に入れて学生服の内ポケットに入れていた。講演が終わったら素早く本人に手渡すつもりであり、その任務は自分にあった。講演が始まる前、織田さんからは講演について特に質問もなく、穏やかな話に終始した。私たちの「早稲田スポーツ」についての知識は十分に持っていなかった。この日のテーマは「早稲田のスポーツとオリンピック」あるいは「早稲田とオリンピック」というような感じの話であった。

自分は織田さんが講演を始める前に大隈講堂のステージに進んだ。自分は「早稲田スポーツ」の責任者として、開会の挨拶を行い織田幹雄さんの紹介をした。早稲田に入学して以降、大隈講堂には何回も入っているが、ステージの上で話すとは夢にも思っていなかった。果たして、大隈講堂のステージの上で自分は言葉が出るのだろうかとも心配していた。開会の挨拶とはいえ、大勢の前で話することなど夢にも思わなかった。大学卒業後、勤務する会社の稲門会会長をやり、大学の商議員に推されて、商議員会会場の大会講

堂には何回も入っていた。そのたびごとに、学生時代に自分がステージの上で織田幹雄さんを紹介した昔の場面を幾度となく思い出したものである。

ステージの袖にいた時から緊張していたのは事実。壇上で満足に話ができるか全く自信がなかった。ステージには急ぎ足で上がった。理由は講師の織田さんがすでにステージ横に来ていたからである。しかし、いざ、腰を据えると案外落ち着くもので、最初の言葉が出ると客席の学生の顔が一人一人見えてくる。「早稲田スポーツ」の誰と誰とが座っているな、と直ぐに確認ができた。これは予想外のこと。無茶苦茶に上がってしまい、満足に話ができないのではないかと思っていたのは杞憂だった。この大勢の前で話をするという経験は、その後の社会人生活の中でも大いに役立ったのは言うまでもない。日経新聞社系列の研究所が主宰するセミナーの講師をやった時も案外、上がらずに話ができたものである。

織田幹雄さんが講演をしている間じゅう自分はステージの袖で聞いた。小一時間がアッと言う間に過ぎて用意していた謝礼をいつ渡そうかということばかりを考えていた。しかし、織田さんは話を切り上げるとまさに風のように大隈講堂を後にしてしまった。いつ、自分の横を通ったのかも分からなかった。慌てて、講堂の横から外へ出て追いかけると、織田さんの姿がわずかに見えた。走ってようやく織田さんに追いつき、講演の御礼を言った。この時、内ポケットに入れてあった謝礼を取り出すと、織田さんは「いりません」ときっぱり断った。そのお金は君たちで使いなさい、とも付け加えた。そういえば、講演が始まる前に織田さんは「謝礼は不要です」と言っていた。それは単なる外交辞令ではなく本当だったのかと改めて感心した。しかし、常識的には自分の失態である。講演終了を見計らってこちらから素早く織田さんにお礼を言うのが筋であった。ステージ横にしながら織田さんの退場を正確に見届けられなかったことが第一の失敗であった。催事経験がない私たちの経験不足を露呈してしまったと言える。後日、競走部・河原マネジャーの所に行き講演会の御礼を言い、謝礼問題の仔細を説明した。河原さんは織田さんの性格や行動を話すばかりで、謝礼の授受問題は取り合わず、「心配はいらないよ」と言うばかりだった。また、織田幹雄さんは心の大きい人で、謝礼のことなど全く気にしていないとも言った。卒業後 50 年のホームカミングデーで早稲田に行き、大隈講堂を仰ぎ見た時、ふと織田幹雄さんのことを思い出した。

昭和 40（1965）年に母校・早稲田大学の教授に就任している。その後も国際陸上連盟（IAAF）技術委員などを長く務め後進の指導に当たった。昭和 34（1959）年、紫綬褒章受章、同 51（1976）年 IOC オリンピック功労賞、同 63（1988）年、陸上界初の文化功労章などを受賞、平成元（1989）年、日本陸上競技連盟（JAAF）名誉会長に就任。平成 10

(1998) 年 12 月 25 日、93 歳の長寿を全うし、鎌倉市で亡くなる。この逝去の報は広くマスコミによって伝わった。

なお、「早稲田スポーツ」創刊号（昭和 34 年 11 月 17 日発行）には織田幹雄さんの記事が掲載されている。文章は一般紙からの引用と思われるが、競走部担当の山崎が整理したものである。

## 52 同期のマネジャーとの付き合い

「早稲田スポーツ」を創刊した昭和 34（1959）年秋から一貫して取材窓口は運動部のマネジャー諸氏であった。私たちは全員が 1 年生だったが相手のマネジャー諸氏は例外を除いて 4 年生、自分たちが 2 年生になってもマネジャーは 4 年生、常に取材相手は上級生だった。私たちは 4 年生になる前に「早稲田スポーツ」の編集実務・実権を後輩に譲った。従って、私たちは同学年のマネジャーと一緒に仕事をする機会は持たなかった。しかし、3 年生になると、各運動部でも次のマネジャーは大体決まってくる。私たちが 3 年生になった頃には、およそ、次のマネジャーが見えてくる。こうした経緯があって、自分も 3 年生のサブマネとの付き合いが多くなってきた。2 年生の後半に自分は編集長になったが、その前は主務、つまり「早稲田スポーツ」のマネジャー役を務めていた。2 年生から 3 年生にかけて自分は「早稲田スポーツ」の取材のため同学年のサブ・マネジャーとの付き合いを深めた。同期のマネジャーたちとの付き合いはその後、大学卒業後も延々と今に至り長い交流となっている。

中でも、深い付き合いがあったマネジャーに杉浦康之（野球・岡崎商）、坂本裕史（水泳・岩国高）、山田脩一（スキー・弘前高）、渡辺定恭（競走・秋田高）、白田裕（バレーボール・早大学院）等がいた。残念なことに白田裕は 4 年生の時にアメリカ旅行中に不慮の事故死に遭い、付き合いが途絶えてしまった。なお、これにマネジャーではなかったが応援部（リーダー）の中嶋修が加わる。中嶋は京都の平安高校の出身で、応援部はもともと神宮での野球の応援が多かったため、よく神宮で会っていた。中嶋はその人柄の良さから人を引き付ける魅力を持っていた。自然にこの 5 人に自分を加えた 6 人が昭和 34 年入学の運動部とその取材者ということで卒業後も長い付き合いが続いている。野球、スキーは自分の担当部でもあったため、早い時期から杉浦康之と山田脩一との接触はあった。この同期のマネジャーたちは、他の運動部の人たちに比べ、遥かに「早稲田スポーツ」をよく知っていた。当然、早くから「早稲田スポーツ」に対する理解度も深かった。従って、彼らは早くから「早稲田スポーツ」の応援団でもあった。運動部同期のサブ・マネジャーたちとの付き合いは、互いに 3 年生、4 年生になるに従って、その接触は多くなった。高田牧舎にゆけば、誰かがいるという具合に改めて約束をしなくてもしょっちゅう会ってい

たことになる。

「早稲田スポーツ」創刊間もない頃から、リーグ戦の試合がある時は必ず神宮の正面玄関で野球部のマネジャーに会ってから、スタンドに入っていた。これが新聞創刊当初からの習わしだった。しかも、ネット裏の記者席に入っていた。同学年のマネジャー・杉浦康之との付き合いも黒須、駒井各マネに続くものだった。先輩マネの引き継ぎも良く杉浦康之は「早稲田スポーツ」の神宮球場ネット裏席への入場は早くから知っていた。当初から黒須陸男さんの尽力によって実現したものだった。杉浦康之とは互いに1年生の時から顔を知っていた。自分が「早稲田スポーツ」の編集実務に関わっていた2年間はもちろん、新聞制作の業務を後輩に譲った4年生になっても神宮球場には入ることができた。4年生の時には正マネジャーは杉浦で、サブマネに千田という東北の人が付いていた。杉浦は多忙を極めていた時である。杉浦も最初からマネジャー志望ではなかったはず、入部時には1塁手として入ったという話を本人から聞いた。なるほど、杉浦は背が高く1塁手には向いている体型である。早稲田野球部には全国から優秀な高校球児が大勢入ってくる。当然、熾烈なポジション争いがある。杉浦は其中で、選手生活を諦めたのかあるいはマネジメント能力を認められてマネジャーに転向したのかは聞き損なった。確かに、日頃の杉浦は野球の選手にしては理論家であり、マネジメント能力に長けていた。彼の話には相手を説得する力があつた。こうした長けた能力がマネジャーに適していたのかもしれない。ある時、面白いことを言った。「俺の家は岡崎だが、早稲田スポーツの宇野英雄の家とは遠縁に当たる」。彼らは同じ愛知県であり、縁者であっても少しも不思議ではない。確かに宇野の家は海沿いの岡崎から深く川を遡っていった在にあつた。しかし、宇野からはっきりとその通り、という言葉は聞いたことがなかった。長い歴史の中で、両家の付き合いも消えてしまったのだろうか。

スキーの試合は、当然、東京から遠く離れた雪深い土地で行われる。3年生の時には、新聞の業務が入り、結局行けなかったが、寸前まで長野県野沢温泉スキー場で行われるインカレを取材する予定だった。段取りはマネジャーの山田脩一がやってくれた。新聞の仕事が入ったのでは仕方がなかったが、山田は最後まで残念がっていた。それ以後、残念ながらスキー部の試合を取材する機会はなかった。山田は青森県立弘前高の出身で元は距離の選手。山田と話をしていると、しきりに距離の話が出てくる。青森県は元来、距離の選手を多く輩出していることもあり、県としても距離競技に対する理解が高いという。高校時代の山田脩一は、全国的にも名を馳せた選手だったが、試合のことは本人からは詳しく聞いたことがない。山田はかなり政治的統率力も持ち合わせる男で、卒業後、スキー部OB会の会長に就いた。かなり多忙で、会うごとに腕に抱えた鞆が重そうになっていた。山田が会長に就いた頃から、現役のスキー部は男女ともに強くなり、度々インターカレッジ

で優勝する快挙を成し遂げていた。祝勝会が開かれると、山田は気を利かせて同期の私たちにも案内状を送ってくれた。同期で作る「稲門体育 38 会」の主要なメンバーが集まり一緒に祝杯を挙げたものである。

水泳部マネジャー坂本裕史の思い出は水泳部のことよりもどうしても本のことになる。山口県立岩国高校出身の坂本はマネジャーに最も要求される緻密で真面目な性格の持ち主だった。常に本を携え読んでいた印象が強い。もっとも、坂本裕史と本が結びつくのは、卒業後に彼が就職した中央公論社時代のことが多い。自分が好きな、というより自分が早稲田で勉強したかった会津八一の全集を出していた出版社である。まだ、三十代の頃だったか、自分は改めて会津の本を読もうと、中央公論社から出た何巻目かの会津八一全集を買い出した。その頃、偶然、中央公論社があった京橋で坂本に会った。坂本は、会津の本をどうせ買うなら自分を通じて買ったらどうかと言う。出版元であり、坂本は社員であるため多少安く買えると言う。少しでも安く買える機会を見逃すわけにはいかない、翌月から坂本を通じて会津全集を買った。今も、わが家の書棚の深くにある 20 巻以上もある会津全集を眺めては坂本の顔を思い出す。坂本は水泳部の中でも競泳ではなく水球の選手だった。坂本を知った頃にはすでに坂本から水球の話聞くことはなく、水泳部全体のマネジャーとしての道を進んでいた。同じ水泳部の同期で坂本と親しかった梅本利三（奈良・五條高、後に主将）と横森一三（山梨・甲府一高）も忘れがたい。梅本は後にアジア大会で優勝し、アメリカへ行った時のレースで出した 400 ㍎リレーの記録は一時期、世界新記録だった。リレーのメンバーには絶頂期の山中毅（石川・輪島高）が入っていた。

競走部のマネジャー渡辺定恭（秋田・秋田高）は、教育学部国文学科の同級生である。しかし、教室で渡辺と親しく話をした記憶はあまりない。互いに学業以外の活動が忙しかったからである。渡辺は秋田高校時代、投擲（円盤、やり投げ）の選手で、期待を背負って早稲田に入学した。しかし、大学の実力は想像以上で、選手生活に見切りをつけたという。そんな時に、競走部の大先輩である政治家の河野一郎事務所からの話があり入った由。渡辺は同じ競走部OBで一郎氏の長男・洋平氏との関係が強かったのかもしれない。渡辺は河野さんの事務所に通って住み込みで仕事をしていたという。事務所が東京なのか河野の本拠地の平塚なのかは詳しく聞いていなかった。多分、平塚だったと思う。付き合い出してから渡辺は河野一郎の話はしなかった。教室であまり顔を見なかった渡辺も後年話すことには「極力教室に出ていた」と言う。

自分と渡辺との接点は意外なところにもあった。3 年生の夏、クラスの友人・野田敏之と、たまたま教室で北海道旅行の話をしていると、渡辺が「良い機会なので北海道の帰りに秋田にも寄ったら」と声をかけてきた。なるほど、秋田は渡辺の出身地。両親が今も健在だと言った。どうせ、北海道まで行くのだから、帰りに秋田に寄る案もいいなと思って



プランに入れた。渡辺の家は、市内の中心部からも近い所と言う。しかし、結果としては、この親切な誘いも自分たちの計画の杜撰さから思い通りに旅が進まず、十和田南駅で別れた野田とは別行動になり秋田行きは実行できなかった。自分は会津若松で「早稲田スポーツ」の夏合宿を計画していたのである。とても、時間的余裕がなかった。日本海側に出ることができずに太平洋側へ出た。そこで、別項に書いた通り、佐々木大助さんとの不思議な出会いがあったのである。自分は自ら主宰した「早稲田スポーツ」の合宿にも遅れると言う失態を演じたのである。旅の途中、秋田の渡辺には電話を入れて秋田訪問ができない旨を説明した。夏休み明けの教室で渡辺に平謝りに謝ったことがあった。何でも、旅で疲れているだろうからと、渡辺家では風呂を沸かして待っていたらしい。そうしたことで、あまり話をしなかった渡辺とも親しくなり、しばらくして、渡辺は自分の柏の実家に泊まりに来たことがあった。「柏も秋田と変わらない田舎だな」、というのが渡辺の柏に対する印象だった。実家は柏の中心地にあるのではなく、まさに片田舎の雰囲気が残る畑が多い土地にあったからである。早稲田競走部は歴史も長く、日本記録保持者やオリンピック優勝者など大物アスリートを多く輩出していただけにマネジャーの仕事も苦勞が絶えなかったらしい。渡辺はそんな苦しいことは全く顔にも言葉にも出さなかった。

もう一人、マネジャーではないが同期の親しい友人に中嶋修（滋賀・平安高）がいる。中嶋は応援部リーダー、従って、彼の主な活躍の場は神宮球場の学生席にあった。小柄ながら彼の応援の指揮ぶりには定評があった。声が大きく的確なリーダーぶりを発揮したからである。主将の木村忠泰（大阪・春日丘高）とコンビを組んで早大応援部のリーダー部門をガッチリと握っていた。中嶋の活躍は体育局所属の各運動部の中でも目立ったものになった。彼はマネジャーではないが、自然な形で私たちの仲間に入った。みんなが中嶋を良く知っていたので、何の違和感もなく、自然な形でグループの一員になり、仲間のリーダーになった。「早稲田スポーツ」の基本的な仕事は各運動部の試合を見て記事を書くことにある。従って、神宮球場はもとより、各地の運動場に行って試合を見る時、必ず応援部と一緒にいる。そんな時に、中嶋は笑顔で挨拶に来たものだった。中嶋は自分よりも年長者だった。その上、リーダーとしての高い資質を持っていた。4年生になると、私たち6人は誰言うこともなく、卒業後の仲間との関わり合いをどうするかについて話し合いを持った。こうした話の中では、杉浦と中嶋が中心にいた感じがする。野球部と応援部の関係は大学野球においてはある種、表裏一体の形であり杉浦と中嶋もそれに近い関係にあったようだ。杉浦、中嶋が中心となって昭和38（1963）年卒業の早稲田体育局所属の各運動部卒業生を結束して行くことになる。これが、後に運動部卒業生全員で構成する「稲門体育各部38会」の結成に繋がってゆく。最初は、会のリーダー的存在だった杉浦は体調を崩し、会の仕事が十分にできなくなり、名実ともに中嶋が「38会」のリーダーになった。

平成 24 (2012) 年、私たちが卒業して 50 年の記念の年、大学から招待を受ける「ホームカミングデーホー」の年で、大学から招待状が来る最後の機会である。大学は卒業生を温かく迎え盛大な式典を開く。大隈庭園をはじめ構内の様々なスペースを使って模擬店を出して卒業生を歓迎する、賑やかなお祭りの様相を呈する。記念会堂で開かれる記念式典がメインの行事である。総長が挨拶し、卒業生代表が返答をする。記念会堂は入学式、卒業式、さらにロシアの宇宙飛士ガガーリンを迎え、東京オリンピックではフェンシング会場として使われた場所である。それだけに広い。

私たち昭和 38 (1963) 年の卒業生は、各運動部のマネジャーが世話役となって、卒業後間もなく「稲門体育各部 38 会」を結成している。この会では、平成 24 年にはホームカミングデーに合わせて最後とも言うべき懇親パーティを開いた。卒業後、5 年ごとに開いていた「懇親パーティ」の総決算的パーティにしようとの意気込みがあった。すでに年齢的にも全国から同期を集められる最後の機会と判断してのパーティである。この大パーティの立案から実行までを積極的に進めたのが前記のマネジャー連だった。会の中心には常に中嶋修がいた。中嶋はすでに「稲門体育各部 38 会」の会長に就任していた。渡辺定恭が副会長、大パーティの幹事役を自分が担った。山田脩一も坂本裕史もすべての打ち合わせに参加するほど結束が固かった。会発足直後から会長を務めた杉浦康之は体調を壊し満足な形で役割を担うことはできなかった。自分は 400 人を超える各運動部の O B を相手にした最後の同期会の幹事役を一人で務めることになった。最初はそれほどのことではないだろうと思っていたが、とんでもない思い違いだった。大パーティの案内書作成、その発送、回収、参加者名簿の作成など裏方の実務はかなり多忙だった。毎日、毎日パソコンに向かう日が続き、招待者である元総長・奥島孝康、元体育局長・佐藤英善両氏あての招待文も作った。作業は常に中嶋修との電話や F A X で連携をとって進めた。このパーティの司会は自分たちの同期で元フジテレビアナウンサーの露木茂（早大学院）が勤めた。大パーティが終わった時の感慨は入道であった。無事に終えることができたのは総て同期のマネジャー仲間の結束の賜物と思っている。

話は遡るが、大学 4 年生の頃、私たち 5 人、つまり坂本裕史、山田脩一、渡辺定恭、中嶋修と自分（杉浦康之は不参加）は、機会ある毎に体育館事務所の五十嵐一幸さんを囲む会をもった。五十嵐さんは体育館事務所で働く職員で、田古島浩さんの次の立場にあった人で、各運動部の窓口になっていた人である。しかも、「早稲田スポーツ」が創刊時に編集用の部屋がない時に甘泉園近くの大学の施設「甘泉寮」を紹介してくれた人であった。私たちは体育館事務所を仮部室にしていた関係で、五十嵐さんには毎日のように会っていた。五十嵐さんは温厚な人で、運動部の各マネジャーからも親しまれていた。同期のマネジャーも常に五十嵐さんを通じて大学からの書類を受け取り、五十嵐さんを通じて書類を

提出していた。次第に気持ちに通じて、私たち親しいマネジャーと一緒に安い居酒屋で懇親会を持つのは自然の成り行きであった。この会は、日頃の職務に対する感謝の意を示すと同時に情報交換の場にもなった。部室がない「早稲田スポーツ」が長期間にわたって体育館事務所の一角を占拠する形で使わせてもらった関係は、もしかすると、どの運動部よりも体育館事務所との関わりは深かったのかもしれない。大学を卒業して、私たちのほとんどが東京に仕事の間を持っていた頃にはこの定期的な会合は続いていた。そんな時も、五十嵐さんは温厚な性格そのままに私たちの会に出席していた。

## 56 体育局からの就職のはなし

4年生になってしばらく経った頃、体育館事務所の村田さんから電話をもらった。体育局でスポーツに詳しい人間を探していると言ったので、君の名前を出した。ついては急いで体育局へ行ってくれないか、と言う。何ごとかと思って、記念会堂横の体育局事務所に行った。事務員に趣旨を話すと、急いで教務主任の所へ行けとのこと。当時の教務主任は商学部教授の町田さんだったと思う。上層階にあった部屋へ行くと、「君はスポーツ新聞をやっているの、適任かと思って、相手に君の名前を言った」、一体、何の話か、しばらくは分からなかった。良く聞けば、文部省を通じて国立競技場への就職の話が来たのだと言う。要するに、国立競技場で働く気持ちがあるか、ということだった。これにはびっくりで、体育局もこのような話に応じてしまうのかといささか不安にさえ思った。ただ、こちらが優柔不断、即答はできないと言うと、町田教授、先方は急いでいるので、一度行ってみたらどうか、と言う。町田さんは商学部の教授だったが、それまでに話をしたことがなかった。体育局に行くと、決まって安井さんの部屋に直行し、いろいろ相談したり、助言をもらったりしていたが、それが終わると急いで部室に帰っていたので、町田さんの所へは寄ったことがなかった。

所定の日に、文部省の若い人が「現場を案内する」と、車で大学まで来た。言うなればお迎えの車だった。言われるままその車に乗って現地、つまり国立競技場に行った。車は、国立競技場の正面に到着。直ぐに脇の入口から事務所へ入った。5、6人の職員がいた。車と一緒に乗って来た人はこの職場の人間ではなく、霞ヶ関の文部省に勤務しているという。車の中で聞いたが、国立競技場は文部省が管轄する外郭団体の一つで特殊法人だという。その外郭団体が即戦力になる人間を探していたのだ。国立競技場の人が、すぐに競技場を案内するということで、まずスタンドへ向かった。誰もいない競技場のスタンドは寒気がするほど殺風景だった。12月の早明ラグビーにはスタンドが超満員になるというのに、人間が一人もない競技場は不気味なほど静かだった。すり鉢の底のよう

な場所がフィールドで赤茶けた色の地にレーンがくっきりと浮かんでいる。これはなかなか美しいものだった。3人くらいでスタンドをぐるぐる歩き、外側の通路を通過して再び一階の事務所に戻った。どのくらいの時間、競技場にいたのかは覚えていない。ただ、この職員になるというのは、国家公務員ではなく単なる外郭団体（国立競技場）の職員になるという。当然だと思った。国家公務員（キャリア）であれば上級職の公務員試験の突破が絶対条件であることは知っていた。つまり、国立競技場に勤めるということは単なる一外郭団体の職員になることで、公務員試験の可否は関係ないということである。もっとも、文部省の人がわざわざ車を出して大学まで迎えに来るということは何のことか、一度話を聞いただけではわからなかった。文部省の人は現地での説明が終わると、再び車で体育局の事務所まで送ってくれた。直ぐに上層階の教務主任室に町田教授を訪ね一通りの報告をして帰った。

国立競技場の大きなスタンドを歩いている最中に自分の気持ちは決まった。文部省の外郭団体であれば、民間企業のように潰れるという危険はないが、果たして仕事に魅力があるのだろうか大きな疑問を持ったのである。従って、この問題の決着は早かった。日を置かずに町田教務主任にはっきりと自分の意見を言って終了となった。

## 57 頓挫した「野球部創部 60 年誌」の発刊計画

4 年生になって、ようやく「早稲田スポーツ」の業務から解放され、個人的な自由な課題に取り組めると思っていたら、安井俊雄体育局長直々の話で、早稲田運動部創立 60 年の記念誌発行に取り組むことになった。「輝く早稲田スポーツ 60 年のグラフィック」の依頼だった。このこともすでに書いた。

昭和 37（1962）年の夏ころだった。野球部マネジャー杉浦康之から「急ぎ相談したいことがあるので会いたい」との話があった。自分は長い間、野球部の担当をしていたため、杉浦とは気軽に話ができる仲になっていた。約束の高田牧舎へ行くと、これもすでに親しくしていた同じ学年の写真部・今井隆一（東京・早稲田高）も杉浦からの要請があったと店に来ていた。杉浦と今井も前からの知り合いという。スポーツ好きの今井とは早くから付き合いがあった。3人揃ったところで、杉浦は唐突に話を始めた。今年は野球部の創部 60 年になる、良い機会なので、野球部 60 年誌を出したいと言う。「早稲田野球 60 年の歴史」、「早稲田野球が歩んだ 60 年の歴史」、「写真で見る早稲田野球の 60 年」など、彼の頭には、記念誌のタイトルまで入っていた。それほど杉浦の頭の中は記念誌発行で一杯のようだった。彼がいつからプランを思い付いたのかは分からない。杉浦は私たち「早稲

田スポーツ」4年生が体育局からの依頼で「輝く早稲田スポーツ 60年のグラフィック」を作っていたことを知っていた。体育局の記念誌を出した時に初めて知ったが、「早稲田スポーツ 60年」とは、野球部、漕艇部、庭球部の創部がそれぞれ明治35（1902）年を指し、それ以来60年経つという。その時にも、杉浦は奮闘して、野球部の大先輩からの写真を多く借りていた。

杉浦が、突然、野球部創部60年の記念誌を出すと言い出した裏には、私たちが作った体育局の記念誌の存在があったようだ。杉浦のプランは時期的には体育局の記念誌の発行とそれほど隔たりがない。今井もこの話を初めて聞いて、驚いた顔をした。杉浦は、写真を多く使って、目で見て野球部の歴史が分かるようにしたいと言う。まだ明治期に卒業した大先輩たちも多く健在だから、古い先輩たちから写真を借りるなら、今が絶好の機会だとも言った。大先輩たちには自分から連絡をとって借りる手配ができるとも言う。話す言葉にも自信が漲っていた。従って、目指す刊行物は、過去に出されていない本、つまり、写真と文章をミックスして見やすいものにしたいと言う。二人に集まってもらったのは、古い写真や史料は自分の力で集めるので、野球部の歴史を文章にすること、ここ数年の比較的新しい写真を今井の力で何とかならないかとの要請だった。これが、自分たちを呼んだ理由であった。

野球が好きな今井や自分は杉浦の話に興味をもったが、果たして実現性があるのか、大きな疑問を感じた。第一、早稲田野球部の歴史本だったら、大手の出版社も飛びつくはずだと思った。特に、ベースボールマガジン社は創業者が早稲田のOBであり、長男の池田郁雄（早大学院）は自分たちと同じ昭和38年組で、ゴルフ部の主将を務めた人である。

近々、社長の座に就くというのが専らの噂であった。杉浦がプロの出版社に話を持って行かずに私たち素人集団で作ろうとした本当の理由は分からなかった。杉浦が案外簡単に記念誌発行の話をしたのも何となく気にかかった。自分は「早稲田スポーツ」や「早稲田スポーツ年鑑」の発行経験から活字モノを作る難しさを十分に知っていたので、この計画はかなり難しいのではないかと二人に言った。杉浦はしきりに、野球部創部60年だからできる仕事で、それも学生の手で作るところに意義があると力説する。日頃、物静かな男がこれほど強く言うのはなぜだと不思議に思った。

杉浦康之の力説に次第に二人も圧倒されてきた。しかし、この日は杉浦の個人的な腹案を言ったに過ぎないのだと冷めた感じを持った。なぜなら、肝心の発行主体、資金計画、販売計画などが明確になっていなかったからである。杉浦が強硬に言い放つ裏には何か確たるプランが潜んでいるのかもしれないと思った。時折、彼が言葉に出す稲門倶楽部という名前が気になった。いずれにしても、この日は杉浦の記念誌発行の粗いプランを聞いて

ただで私たちは別れた。

再び、杉浦康之から電話があって、今井と二人で安部寮の杉浦を訪ねた。杉浦はすぐに出てきて、安部寮の門の傍の古い倉庫を覗いて見ようと言った。倉庫の管理もマネジャーの仕事だと言う。自分と今井は倉庫の中に入ったわけではなく、開いた扉の外から中の様子を垣間見たという程度のものだった。中はカビのような臭いが充満するまさに倉庫そのものだった。中には野球部の重要な史料が詰まっているのかもしれない、しかし、いかにせん整理が十分ではなく、この中の資料を整理して外に出すには相当なエネルギーを要するに違いないと思った。倉庫の中には明治 35（1902）年の野球部創部以来の史料が収められていると思うと、胸が熱くなった。倉庫の中はまるで未知の世界だった。これまでの粗い話の中では自分が明治 35 年に創部された早稲田野球部の歴史を書く予定だったので、何としても中の史料を早く見たかった。野球部草創期の人間の大半はすでに鬼籍に入っているので、昔の話を聞くのは難しく資料を読むのが先決だった。

年が明けた頃だったか、再び杉浦康之から召集がかかった。行き慣れた喫茶店に行くと何と杉浦が蒼い顔でいた。顔を見てこれはただ事ではないと直感した。杉浦がボソボソと話し出した。彼は「この計画はすでに早い時期に上層部に話をしていたので、刊行自体に問題はないと思っていたが、つい最近になって、突然、中止をするようにと言われた」と言った。上層部といえば、石井連蔵監督しかいない。今回の杉浦の話の件で、何か監督の逆鱗に触れたのかと思案するよりなかった。腹心のマネジャーが中心となり、本を刊行するだけなら問題もなかったが、外部の人間を入れることに問題があったのか。肝心の監督の話を聞いていないので「中止」の意味は全く分からなかった。なぜか杉浦もその理由は話さなかったし、外部の人間として今井と自分の名前は一切出していないことを強調した。こちら二人も、突然、悪者のように思われること自体納得がゆかなかったが、具体的な作業は何もしていなかったので、引き下がることには何の抵抗もなかった。一時の夢物語を聞いたのだと思うほかはなかった。ただ、チラッと垣間見た安部寮の倉庫の中は一度見てみたい場所であった。私たちにとっては、ことを荒立ててまで記念誌を発行する必要性もなく、むしろ、早い段階で中止命令が出たことが良かったとさえ思った。3 ヶ月ほど早稲田野球の本の発行を夢に見たと思えば何ということもない。

それから何年かして、大手新聞に「安部寮の倉庫からトルストイの手紙が出る」との記事が大きく出た。早稲田野球の祖、安部磯雄はロシアの大作家トルストイとの交流があったのだ。この新聞記事を見て、4 年生の時、杉浦、今井と三人で覗いた安部寮の倉庫はやはり宝の山だったか。幻と消えた野球部記念誌発行計画の一コマである。

## 58 早稲田で大活躍した教育実習の生徒

### —野球部・谷澤健一君のこと—

高校時代の谷澤健一の大活躍は新聞（千葉版）で読んで知っていたが、大学でどれほどの活躍ができるか分からなかった。谷澤健一と自分とは不思議な縁で結ばれていた。自分が大学4年の時に教職課程で義務付けられていた「教育実習」で、母校の柏中学（千葉県）に行った時、担任したクラスの生徒の中に谷澤健一がいたのだ。自分が心配することもなく谷澤健一は早稲田で大活躍をした。プロ（中日）に入っても、新人王を取るやら首位打者に輝くやら大活躍をした。

「早稲田スポーツ」在籍中の出来事に忘れられないことは実に多い。その中の一コマを思い出しながら書いてゆく。「早稲田スポーツ」の業務を後輩に譲った4年生の時のことである。体育局から依頼されて作った「輝く早稲田スポーツ 60年のグラフィック」の業務もほとんど終わった頃だったか、自分は教育実習で母校（千葉・柏中学）へ行った。自分には、将来、教職に就くという確かな目標はなかったが、教育学部の学生の多くは教職課程の授業を取っていた。クラスの周囲の流れの中で自分も教職課程を取ろうと決めた。すでに書いたが、野球部の友人蒲原弘幸も熱心に教職課程の授業に出ていた。

「早稲田スポーツ」の業務はすでに後輩に譲っていた。自分には「早稲田スポーツ」の仕事に入ってから教師になる気持ちはほとんど消えていた。下級生の時は、それほど気にしていなかった教職課程の重要な一つに「教育実習」がある。いわば、教育の現場に行って授業をするのである。教育実習そのものには何の抵抗もなかった。教職課程を取っている学生の義務であり、これをやらない限り教師の資格が取れない。教職課程の授業にもほぼ出ていたので、単位取得には問題がなかった。残るは教育実習のみだった。どこで実習をやるかは学生に任されていた。大学の2年の頃から教育実習をするなら母校の柏中学と決めていたので大学に実習学校の斡旋を依頼する必要はなかった。

大学発行の書類一式を持って柏中学に行き、実習日程の相談をした。自分が中学に在籍していた時の教師も多く残っていて話は簡単だった。教頭をしていた教師とは中学時代にも良く話をしていた。「君が教師になるのか」、と幾分いぶかしげに顔を見られた記憶がある。さらに、自分の専攻は国語国文学、柏中学の国語教師の世話になることになる。中学時代から知っている人であるが、自分のクラス担任になったことはなかった。何となく硬い先生だったと記憶していた。形式的な書類が整っていることを確認して、自分の実習の日程が決まった。当時は道路も整備不足で家から歩いて行かなければならない。約30分の道のりだった。教育実習が始まったのは昭和37（1962）年の秋口だったと思う。

登校初日、早めに中学校に行き職員会議に出た。校舎は昔(自分が中学生の頃)のままだった。教員室(職員室)も同じ場所にあった。教師の多くが異動で代わっていたが、一番驚いたのは校長だった。何と自分が小学校(柏第二小学校)の高学年の時に赴任してきた小学校長だったのだ。小学校の校長は小学校の校庭の隅にあった校長官舎に住んでいた。まさに学校の中に住まいがあったのである。校長の長男は1歳年上だったが、毎日のように校庭で一緒に遊んだ仲であった。校長室に挨拶に行くと、校長は開口一番、「そうか、教師になるのか。うちの倅も元気だ」と言った。校長はジロジロと自分の身体と顔を見回した。国語の教師が自分の実習の担当になり、授業の割り振りなどを決めていた。わずか2週間の実習の期間、自分はクラスを一つ受け持つことになった。つまり、朝は朝礼をやり、夕方は終礼をやり、生徒たちの指導・管理もやるのだった。

実習初日に担任のクラスに行き、生徒の前で挨拶をした。案外、上がることもなく落ち着いて話ができた。クラスの生徒の顔を見ているうちに、何と実家の隣の家の息子がいるではないか。実家近くの家は大半が農家で、野菜栽培で暮らしをたてていたが、その子の家は、数年前に他所から引っ越してきたサラリーマン家庭だった。従って、自分は、その家の子供たちのことは良く知らなかったが、名前だけは分かっていた。授業が終わって、家に帰ってから母親に隣家のことを聞く始末だった。隣家の生徒の方でも自分を知っている様子はなく、顔を合わせても何も言わなかった。

この隣の息子とも、社会人になって奇妙な出会いがあった。彼は成績優秀で地元も県立高校を出て東大へ入り、近所でも評判の成績優秀者だった。東大を卒業すると、東京銀行に入り、しばらくして彼の母親がにっこりしながら息子はニューヨークに赴任しと言った。ザッとこのような経歴を知っていた。自分は会社では新規事業の開発に携わる期間が長く、さまざまな業界の様々な会社と人間と新規事業の開発について仕事をしていた。ある日、東京銀行へ同じ部の人間を数人連れて行き、新規事業の開発に関する会合を持った。東銀の会議室で、両社の出席者の紹介があった。この時、斜め向かいに座っている男の顔に見覚えがあった。何と、その男こそ、教育実習時のクラスの生徒であり、東大から東京銀行に入った実家の隣家の息子だった。彼はアメリカ帰りの洗練された紳士になっていた。会議が終わって、しばらく二人で中学時代の話やアメリカの話をし、さらに自分が赴任していた香港の東銀にも世話になっていた話も少々付け加えた。

2週間の教育実習の期間中、一度は「研究授業」なる公開の授業をやらなければならない。担任のクラスで普通の授業をやるのであるが、その授業は全校の教師に公開されるため、かなりの数の教師が物珍しさのため授業参観に来る。この「研究授業」には、それなりの準備をして臨んだ。教室の後ろの壁に張り付くように何人かの教師たちが立って自分



が行う授業を見るのだった。その中に、小学校時代の校長で、その時は自分が教育実習をしている中学校の校長が来ていたのには驚いた。何もことさら、いつもと違う授業をすることもないと意識しながら授業を進めた。授業では専門外の万葉集を取り上げた。生徒からはいつものように元気な質問が出て、こちらも応えることができた。自分の実習担当の国語の教師も、当然、来ていて静かに見守るように立っていた。自分が受け持ったクラスは比較的成績の良い生徒が集まっていて、落ちこぼれのような生徒はいなかった。実習担当の教師が言うには、少し前にきた学生は授業中、生徒に背中を向けたまま黒板に文字ばかり書いていたという。「君は随分、話をするのが得意ようだな」と変な講評をした。その頃の自分はまだ22歳の若さで元気があった。朝の授業が2階の教室である時には階段を二段跳びで上がったことがあった。生徒からも変な教師と見みられていることが分かり、階段の飛び越し上りはすぐにやめた。

担任のクラスの中で、教室の一番後ろには随分背の高い生徒がいた。あまり質問はしないが、授業は真面目に聞いていた。それでも、こちらから話しかけるときちんと答える男だった。体格が良かったので、何か運動をしているのか、と聞くと「野球部です」と言う。自分も中学の3年生の時に担任の教師から無理やり頼まれて野球部に入り、試合に出ていた経験があった。そんなこともあって、その生徒とは話をするようになった。彼が谷澤健一だった。柏市内のスポーツ用品店の息子だった。ただ、教育実習の期間は2週間、それほど谷澤と野球の話はできなかった。実習期間が終わる時、担任のクラス全員に感想文を書かせた。気を使わないように名前抜きで書かせた。実家の隣家の息子の文章も谷澤の文章もすべて自分の手元にきた。一枚一枚丁寧に読んだが、どれが誰の文章であるかは分からなかった。一人、女子生徒と思われる作文には、先生が階段を二段跳びで駆け上がっていたが、教員になる人のやることではない、と厳しく書いてあったことも思い出である。

教育実習が終わり大学も卒業してから、新聞のスポーツ面で谷澤健一の記事を読む機会が増えた。彼は柏中学から野球の名門、習志野高校へ進み、県内の高校野球で大活躍をしているという記事だった。習志野高は強かったが、彼が在学していた時、もう一步の所で甲子園出場がならなかった。教育実習で会った頃の谷澤は投手だったが、高校では外野手だった。持ち前のバッティングセンスを生かして打者に転向していたのである。新聞で見ると、彼は県内有数の強打者として有名だった。しばらくして早稲田入学の有力高校生の名前を新聞で見た。何とその中に彼の名前があった。不思議な縁もあるものと思ったのは当然である。彼は早稲田に入学すると、1年の秋から外野手のポストを獲得した。

ある時、彼が大学2年生の頃だったか、神宮の正面入口を入った所でばったり会った。

一瞬、彼は不思議な顔をした。なかなかこちらの名前が思い出せなかったのだろう。試合が終わって、神宮の正面で彼を見つけ、久しぶりで話をした。教育実習のとき、彼は中学3年生、こちらが大学4年生、社会人になった自分を知る由もなかった。彼は自分が「早稲田スポーツ」に携わっていることにも不思議な顔を見せた。この時以来、神宮に出かけては谷澤の活躍を楽しみにしたものである。自分は、彼が柏中学―習志野高―早稲田野球部―中日ドラゴンズと彼の野球人生を追いかけてきたような気がする。早稲田のスポーツが取り持つ一つの縁であると言えようか。

教育実習のわが生徒、谷澤健一の思い出はまだある。昭和50年代のこと、自分は会社で会長付の秘書役をしていた。主な仕事は会社を創業した会長に常に付いていることであり、必要があればいつも指示通りに動くことだった。また、会社では会長室の隣の部屋にいて、いつ何ときでも呼びがあれば会長室に入り、時には要人の応対、時には社内の役員との会議などに同席もした。また場合によっては、各種経営計画の立案をやり、定期、不定期を問わず会長訓示用の原案を書いた。出張があれば、国内外のどこへでも随行することがあった。唯一、アメリカへの長期出張だけは例外で、留守番役をしていた。面白いこともあった。毎朝、新聞で株式欄を見て自社の株価を記録したのはもちろん、朝一番で証券会社に電話をして自社株の寄り付き値をノートに書き、会長が出勤すると、直ちにその値を報告するのが日常化した。会社の仕事にはいろいろあると実感した。

昭和52、3年の頃、会長が業界団体の会長を務めていた。名古屋市でその団体の総会があった。名古屋城が良く見えるホテルの大広間が会場だった。例によって随行で前夜に名古屋に着いた。宿泊は自社で保有していた明治期に建てられた名のある建物だった。関連会社が料亭用に使っていた。自分が勤務する会社の場合、名古屋は創業の地、会長自身が名古屋生まれで、幼い頃からの思い出の地、名古屋は大好きだった。会長は総会を仕切る立場で、かなり神経を使っている様子が見て取れた。会議でかなり疲れたのか休憩時間になると珍しくロビーに出ようと言って、会場の外に出てソファに腰をおろした。自分も一緒に会長の隣のソファに座った。その時、ロビーの端をこちらに向かって歩いてくる大きな男がいた。遠くではわからなかったが、近づくにつれ、その顔がはっきりと見え、何と、谷澤健一だった。ちょうど、中日ドラゴンズにいた時で、その年はアキレス腱を痛め、ほぼ1年間プレーができず、治療に専念していた年である。ところが、谷澤独特の治療法が実ってプレーに復帰できる直前だった。谷澤は持ち前の真面目さで治療に集中していたのは間違いない。歩いてくる彼の顔には明るさがうかがえた。歩く姿を見ても全く自然で、足は完全に治っているようだった。近づいてくるに従って、お互い顔がはっきりと見えた。彼は突然「ご無沙汰しています」と言って頭を下げた。隣のソファにいた会長は不思議というよりもびっくりした顔になった。通り過ぎた彼のうしろ姿を見ながら「あ

れは誰なんだ」と、訊ねてきた。自分と谷澤との関係を説明すると「そんなこともあるんだ、追いかけて行ってもう少し話をしたらどうか」と言ってくれたが、自分は動かなかった。会長は慶應時代、運動部経験があり、スポーツマンが好きだった。それに名古屋生まれでプロ野球は中日が好きだった。当然、谷澤の名前は知っていたはずであるが、あまりにも近い距離で顔を見たため、谷澤と分らなかったようだ。その後間もなく谷澤はプレーに復帰しガンガン打ち始めた。首位打者を取った男の復活だった。さらに、谷澤が球界を引退した後も縁があって、地元・柏で会う機会があった。自分が繋いだのではなかったが、自分の所属する流山稲門会が講師として谷澤を招き、野球を中心とした話を聞くことができた。谷澤から「西川さんは柏稲門会ではなく、どうして流山稲門会なのですか」と質問を受けたことがある。

## 59 思い出の大学周辺の飲食店点描

早稲田に進み「早稲田スポーツ」の発行に励んだ約4年間は、あっと言う間に過ぎた感じだった。印象に残るさまざまな出来事の他に飲食店でも記憶に残る店があった。「早稲田スポーツ」の取材源でもあった高田牧舎を例外にしても、早稲田界限には腹を満たすいろいろな店があった。金城庵、ここは元来、蕎麦屋である。安部球場があったグラウンド坂を下ったあたりの角に店があった。大学校舎からはいくらか距離があったが、昼時にもなると店は学生で一杯、蕎麦も良かったがボリュームたっぷりのカツ丼がうまかった。

ただ、金城庵で忘れられないのが昭和35（1960）年秋の早慶六連戦に勝って開いた祝勝会である。会場は金城庵の2階、日頃、昼飯で店に来る時には1階のテーブル席で食べたが、祝勝会は2階の大広間を借りた。何しろ、早慶戦が6回も続いたので、「早稲田スポーツ」は売れに売れた。最初の印刷が1万部、すぐに売り切れ翌日の試合のための増刷を繰り返す。総計何部打ったのか、勘定もままならないほど売れたのである。「早稲田スポーツ」創刊以来の大収入になった。金城庵で開いた祝勝会は、参加費は全員無料、つまり、飲み食いタダの大盤振る舞いをやった。大学卒業後、半世紀経った今も飲み放題、食い放題の祝勝会が忘れられず、金城庵には通っている。

喫茶店「凡」のこともすでに書いた。なぜ、それほど綺麗でもなく普通の喫茶店「凡」に足しげく通ったのかははっきりしない。うまいコーヒーを出すわけでもない。室内も薄暗く清潔感のある店でもなかった。その店の薄暗いテーブルに原稿を広げて書いたり、数人で議論したりしたのだった。既述したが、店のウェイトレスにそれほど若くはないが、親切的な和服を着た人がいた。常に黙って静かにしている客も入る中で、私たちの集団は騒

がしかった。それでも私たちが嫌がられずに長時間も店に居られたのはなぜだったのか。このウェイトレスのお蔭かもしれない。うるさい私たちを嫌がらずに受け入れてくれた人である。小説が好きで、時々本を持ってきて見せてくれたりした。「これ持って行って」と石原慎太郎の初期の本を渡されたことがあった。真偽のほどは分らないが、喫茶店「凡」の経営者は書籍の出版もしていたのではなかったか。なぜなら、時折、和服を着ていたウェイトレスが、自社の本という本を見せてくれたからである。しかし、これも憶測でしかない。しかし、私たちはちゃんと営業活動もしていて、手のひらほどの小さな広告を毎月もらっていた。「早稲田スポーツ」の業務が多忙な時期を含めて私たちの「凡」通いは続いていた。

「凡」の隣だったか「二宮」のタンメンがうまく良く通った。ここの主人のタンメン作りはまさに芸術的で、麺をゆでる間、丼をテーブルに置いて次々と作業をこなす。野菜を切り、麺つゆを入れ、塩を入れる作業が流れるようだった。見ている方も飽きないから不思議であった。多少、塩味が濃いタンメンは絶品と言って良かった。それにボリュームもたっぷり。学生の町ではボリュームの大小がモノをいう。学生はいつも腹が空いていたからである。店はいつも学生で一杯だった。さらに、多忙な私たちが通った食事処としては大学の学生食堂があった。現在は大学本部になっている場所に教室兼事務所が入った比較的大きなビルであった。一般に学生会館と称していた。その1階が食堂になっていた。かなり広い面積を持つ食堂で、味や量はとも角、値段が安かったのが良かった。

2階に就職課があり、求人表などが置いてあった。もちろん、壁には各企業の募集要項が貼ってあった。就職課には4年生になってから頻繁に通ったが、当時はかなりの差別があり、希望する企業に誰でも受験ができなかった。企業サイドでは求人票に際して学部指定をしていた。学内では「政・法・商」が指定席で、文学関係は求人票すらないことが多かった。学部指定なし、との表示がある企業には多くの学生が殺到し学内選抜をすることになる。この選抜もいい加減で単に「優」の数で決められた。学部によって、また教授個人によって「優」の解釈が違わず、しかし、全く考慮されていなかったようだ。単に優の数で就職先が決まり、ひいては人生までも決められてしまうのは、不条理な思いがした。自分にも就職課において人生を決められた思い出があった。4年生の初夏だったか、クラスの親しい男が「証券会社に行きたいので、一緒に就職課に行かないか」と話しかけてきた。まだ、その頃、クラスの中では就職の話はあまり出ていなかった。自分は「早稲田スポーツ」の業務が多忙で、クラスの就職状況を知らなかったのかも知れない。面白いことを言う男だと思って一緒に就職課に行った。希望の証券会社は求人が多かったが、ほとんどが学部指定で、私たちは受験すらできないことが分かった。仕方なく帰ろうとしたところ、目の前に中堅の証券会社が「全学部」となっているのを見つけた。二人揃って所定の

書類に記入したのは当然だった。ところが、世の中は不思議なもので、証券会社を希望した男には受験の機会が与えられずに、自分の方に受験「可」の返事が来た。何のことはない、友人の優の数が少なかったのである。二人で残念会をやったのも学生会館1階の食堂だった。

4年生の時のゼミの時間にも時折、学生食堂へ行ってお茶を飲んだことがある。ゼミでは卒業論文を書くために教師はさまざまなテーマを学生に与え、それぞれが報告をして議論をする方法が取られていた。通常の教室の授業では冗談一つ言わずに話す真面目な先生が天気の良い日で、外へ出たかったのか「外へ出よう」と言った。と言っても校外へ出るわけではなかった。大隈講堂に隣接した所にある大隈庭園に行くのだった。キレイに手入れされている庭は見事だった。芝生が庭園の中央に植えられ、ところどころに大きな石が据えられている。中には腰を掛けるのに絶好の石があった。教授・紅野敏郎（専門・近代文学）さんがそうした落ち着いた庭園の中で、授業をするとは思ひもしなかっただけに楽しかった。ゼミ生も晴れ晴れとした気分になった。卒論ゼミだったので、学生数は十数人しかいなかった。それが良かったのである。早稲田に入ってこうした教室の外、それも構内の庭園の中で授業をするなど考えてもいなかった。芝生や石に座って志賀直哉や武者小路実篤の話聞いたものだった。講義が終わって行ったのが学生会館の食堂だった。先生を囲んでコーヒーを飲んだりしたものだ。この先生、紅野敏郎さんは、当時、駒場の日本近代文学館の創設に尽力している最中だった。先生の恩師、稲垣達郎教授の指導下だった。紅野敏郎さんは実質的には日本近代文学館の創立メンバーであったとも言えよう。紅野さんは健康で88歳まで生きた。それも、亡くなる直前まで外部で講演を行っていたのである。年に数回、都内で行われる講演会には、私たち旧ゼミ生は揃って通い旧師の話を聞いていたものである。終わってから高齢の先生を囲んで一緒に食事をした。先生、なかなかユミークな発想を持っていて、85歳を過ぎた頃、突然、会をやるからと手紙が来た。場所は、早稲田のリーガロイヤルホテルだった。大学のあらゆる建物が新しくなり、元庭球部のコートがあった場所にホテルが建ったのだった。会を主宰した本人は事前に会の目的を言わなかったが、招待者の一人・瀬戸内寂聴さんが「この会は生前葬ですね」と祝辞の中で言って参会者も納得したものである。会の名称は「〇〇の川への前夜祭」となっていたが〇〇の意味は誰もが知っていた。瀬戸内寂聴さんはそこを衝いたに違いない。学生会館の食堂を思い出すといつもこの恩師・紅野敏郎のことを思い出す。

話が横道にそれたので「早稲田スポーツ」のことに戻す。

仮の部室があった体育館事務所時代、私たちの生活範囲は比較的体育館の近くにあった。松井と「早慶戦特集号」の発行を巡って大議論したのも体育館近くの喫茶店。残念な

がら店の名前は忘れるし、店自体もなくなった。この喫茶店にも良く通った。喫茶店の隣に学生が良く通う食堂があった。私たちは毎日のように安い昼飯を食うため通っていた。年配の女性が店内を仕切っていたが、私たちはメニューにない特別な品、例えばカツ丼に煮魚をつけるなど変則的な注文を出しても嫌な顔を見せなかった。いつも気楽に通った店である。そこからバス通りに向かって歩き、大通りを渡った先にあったのが八幡鮎。この店を見るからに老舗で学生にはやや入り難かった。尤も入れば愛想の良い店主が笑顔で迎えてくれた。出される鮎も上品なものだった。八幡鮎には学生時代よりも卒業後に行った回数の方が遥かに多い。八幡鮎から甘泉園に向かって少し歩いた左側に小さな店があった。喫茶店のような、甘味どころのような店でいつも空いていた。店の名前は失念した。創刊間もない頃から暫くの間、私たちは甘泉園にあった大学の施設を借りて宿泊しながら編集作業をやっていたことがあった。その行き帰りに立ち寄ったのがこの店である。店には、なぜか運動部の人たちが多く通っていた。店を仕切る女性はやや年配の女性で明るい人。何の屈託もなく運動部の人たちとの話を楽しんでいるようだった。この店で、思わぬ人と良く会った。当時、国内では無敵のやり投げの三木孝志選手（和歌山・那珂高）だった。私たちより2年年長である。なぜか、入る度に三木さんに会った。三木さんの練習場は東伏見の競走部のグラウンド、早稲田キャンパスからはかなり遠い。三木さんはこの店で、くつろいでいる様子だった。もしかすると、大学の近くに住んでいて、練習が終わるとこの店に来て休んでいたのかもしれない。当時の三木さんは連戦連勝、しかも日本記録も出していた。店に一緒に入った山崎は、間髪を入れずに三木さんに質問をしたのは当然だった。三木さんも突然の質問にも嫌な顔を見せずに応対してくれたのが忘れられない。すでに「早稲田スポーツ」のことは良く知っていた。この店には野球部の人たちも時折、顔を出したりしていた。安部寮からは練習場の安部球場に行くよりも近いので、練習が終わった頃から夜にかけて野球部の人たちが店に来たようだ。大通りからは一本中に入った裏通りの小さな店は、スポーツ選手にとって格好の休憩どころであったに違いない。私たちは高田牧舎とはまた違った運動部の溜まり場を甘泉園近くに発見したのだった。ただ、この店が出す飲料ではアイスコーヒーやかき氷くらいの印象しかなかった。原稿用紙を差し入れてくれた藤井さんも競走部、それに甘泉園近くの小さな店で会った投擲の三木さんも競走部、競走部の人には草創期の「早稲田スポーツ」はかなり世話になっていたことになる。

## 60 卒業後 30 余年、朝日・運動部記者の取材

自分は、最初の香港に始まって神戸・大阪・福岡など転勤も少なくなかった。サラリ

ーマン生活 41 年の中の約 10 年間は東京の本社を離れていたことになる。最後の赴任地・福岡の任務を終えて帰ってきた平成 7（1995）年の夏、朝日新聞運動部記者の安藤という人から会社へ電話が入った。朝日の朝刊スポーツ面で連載する『スポーツひと 半世紀』という企画で「早慶 6 連戦」を取り上げるので話を聞きたいというのが来訪の趣旨であった。安藤という記者は大学の体育局で、松井盈と西川昌衛の名前を聞いたという。「松井が中心で新聞作りをやったので、彼に聞いてほしい」と言うと、安藤記者は、「すでに松井さんに取材をしたが、野球部はすべて西川が担当していたので、野球は良く分からないと言われ、あなたに電話をかけたのだ」という。松井からはあまり早慶 6 連戦の話は聞けなかったとも言った。「大学を卒業してすでに 30 年以上経過しているので、あまり覚えていないが」と念を押して取材に応じた。話を聞けば、連載記事はスポーツ面に数回にわたって書くと言う。この日の取材は 6 連戦の主役、安藤元博に的を絞って聞きたいと言う。その頃、安藤はすでにプロの世界から離れ、普通のサラリーマン生活を送っていた。その安藤の取材を終えたとも言った。安藤個人の話は良く知らないで、自分は「早稲田スポーツ」創刊の頃の話をした。「早稲田スポーツ」という名前の新聞なら大学からの支援がいろいろあったのではないかと不思議な顔で逆質問された。記者は立教の OB であったが、個人的には早慶戦には大きな興味を持っていたと言う。取材された記事は平成 7（1995）年 4 月 25 日に朝日の朝刊スポーツ面に出た。中段の囲み記事で連投の安藤元博の写真が載っていた。見出しと本文は下記の通りである。

### “揺れる時代の中に「華」”

三十五年前、ひとつのドラマが神宮球場で生まれた。東京六大学野球の優勝をかけた「早慶六連戦」。「何が私を連日マウンドに向かわせたのかは分からない。『負けてたまるか』。ただ、それだけだった」。一週間で五試合を投げ抜いた安藤元博（55）はいま、そう話す。…。この年一月、岸内閣が調印した日米安保条約改定をめぐり、日ごとに反対運動が激化した。六月十五日には、全学連主流派が国会に突入し、女子東大生が死亡。学生や労組員などが連日国会を取り巻き、十八日には十三万人に膨れ上がった。…。早大の構内にも「安保反対」の立て看板が並び、授業はたびたび中止になった。松井盈と西川昌衛はいつも、看板に埋もれながら新聞を売っていた。二人は前年、運動部の活躍を学生に伝えるために「早稲田スポーツ」という新聞を創刊。「イデオロギーの問題にしてもスポーツにしても、学内には自由な雰囲気があふれていた」。そう振り返る西川は、野球部を担当していた。東京六大学野球は当時、日本スポーツ界のまさに「華」だった。（安藤嘉浩）

この新聞記事が出た日の朝、突然、机の電話が鳴った。日本生命から来ていた専務だった。「今朝の朝日を読んでいたら、君と同じ名前の人が出ている。君とは違うよね」と言う。端から否定的質問だった。自分も家で新聞は読んでいたので応答もしやすかった。電話の主は大阪の高校時代に甲子園に出場し、関西の大学野球で活躍していたことは日本

生命の知り合いから聞いていた。卒業後、日生に入り社会人野球で活躍していたらしい。従って、朝日の安藤記者が書いた早慶戦の記事に目がとまったのかもしれない。生保からの出向だったが、朝日の記事を読んでからは、親しげに話しかけてきた。もちろん、この人は、自分が学生時代に「早稲田スポーツ」をやっていたことは知らなかった。よく説明をすると、専務氏は「なかなか面白いことをやっていたのだな」と素直に褒めてくれた。

## 61 サッカーの川淵三郎さんと「早稲田スポーツ」

川淵三郎さんに初めて会ったのは、「早稲田スポーツ」創刊後、間もない頃、東伏見の早稲田のサッカーグラウンドだった。「早稲田スポーツ」創刊以来、サッカー部の担当は松井だった。高校時代、軟式庭球をやっていた松井がなぜ、サッカーの担当になりたいと言い出した真意は分らなかった。自分の野球部担当希望は、中学時代、それも受験準備に入らなければ時期に、突然、担任教師が野球部監督だったことから、無理に入部させられプレーしたことが忘れられないことにあった。ほぼ1年間、否、シーズンのには半年の野球部生活だったが、かなり面白かった。当時の柏中学は地区の強豪で、地区大会優勝の連続だった。また、毎日、自宅で読む新聞で東京六大学が存在を知り、特に投打に強い早稲田野球が好きになった。蔭山和夫、荒川博、広岡達朗、石井藤吉郎、石井連蔵連、森徹、岩本堯などの活躍を新聞紙上で見るだけで胸が騒いだ。極めて単純な早稲田野球が好きだったことが担当部希望の理由だった。

サッカー部は東伏見に合宿所とグラウンドを持っていた。東伏見までは西武新宿線で30分以上かけて行かなければならない。早稲田からはやや遠かった。東伏見にはサッカー部だけでなく、競走部、水泳部、馬術部など多くの運動部の合宿所や練習場があった。東伏見は早稲田の一大スポーツ拠点になっていたのだ。まだ、所沢にスポーツ科学部が出来る前のことである。

昭和34(1959)年の晩秋か翌35年の早春だったか、松井がサッカーの取材をするので、一緒に東伏見に行かないかと誘ってきた。特に、急ぎの用事もなかったことと、一度、東伏見のグラウンドを見ておきたいと思い、松井について行くことにした。西武新宿線沿線もローカルな時代で、高田馬場から出た電車はしばらくすると田園地帯を走っていた。当然、東伏見駅周辺は田舎の風情が満ちていた。松井は、サッカーの担当なので、すでに何回も東伏見には来ていると言う。まず、サッカー場に行って練習風景を取材することにした。当時の早稲田のサッカー部は大学の中でも強豪校で、川淵三郎（大阪・三国丘高）、宮本征勝（茨城・日立一高）の両エースがいた。当時二人はまだ3年生だったが、すでに



チームの中心選手になっていた。監督は名将と言われ、老練な指揮ぶりに定評があった工藤孝一（岩手・盛岡一高）だった。激しい練習の後、川淵、宮本の二人の選手が私たちの取材に応じてくれた。すでに松井は二人に会っていたので、和やかな雰囲気の中で、話をする事ができた。川淵さんは快活に「何でも聞いてくれ」と言って話をした。それほど大柄な人ではなかったが、顔つきは精悍そのものだった。

「早稲田にスポーツ専門の新聞ができたのは本当に良いことだ。運動部の人間もそれぞれの活躍を一般学生に知ってもらいたいのは当然だ。君たちにもいろいろ、苦労があるだろうが、頑張ってもらいたい。自分たちに協力することがあれば何です」と、頼もしい話をしてくれたのは嬉しいことだった。ちなみに、「早稲田スポーツ」第2号（昭和34年12月14日）に、サッカー早慶戦のことが載っている。

立教が完全優勝した後の試合だったので、伝統の一戦も盛り上がりには欠けた。前半10分C F川淵がまわり込んでシュートを決め、早くも優勢に立った。…学園の脚力は慶大を完全に圧倒しパスもよく通り終始慶大を押しながら得点できず思わぬ苦戦を招いた。しかし、学園の誇るFW・FBの動きは一向に鈍らず、後半三十分CH宮本がゴール前から約七十米独走して、慶大ゴール前に迫ったがタイミング悪く得点できなかった。その直後、三十四分に慶大ゴール前三十米あたりからの宮本のフリーキックを、川淵がきれいなヘディングシュートを決めて待望の勝利点をあげた。更に慶大FBの乱れに乗り、三十七分川淵が当日三本目のシュートを決めて、慶大を振り切った。宮本、川淵の攻守の両コンビは相変わらず、見事なプレーで観衆をわかせた。特に川淵は全得点を一人で決めるという活躍で、来年のローマオリンピックでの期待は大きい。

この記事を見ても、宮本・川淵の連携が素晴らしかったのが良く分かる。この時期の早稲田の川淵・宮本両選手のプレーは光っていたのである。前年は関東大学リーグ戦で立教が完全優勝を果たしたとも書いているように、立教が強かったのだ。記事は、サッカー担当の松井が書いたものに違いないが、残念ながらこの早慶サッカー定期戦がどこで行われたのか、書かれていない。また署名がないのがいささか惜しい。この試合だったか否かは明確ではないが、早慶サッカーが水道橋の後楽園競輪場で行われ（ナイトゲーム）、部員数人で応援に行った記憶がある。

大学を卒業した川淵三郎、宮本征勝の二人は揃ってサッカーの名門・古河電気工業（古河電工）に入った。古河電工には早稲田の先輩・八重樫茂生（岩手・盛岡一高）がいた。八重樫はオリンピックに3回（ローマ、東京、メキシコ）出場し、東京、メキシコでは主将。特にメキシコでは早稲田のエース、釜本邦茂（京都・山城高）を擁して銅メダルを獲得した。八重樫茂生の名前は野球好きの自分も知っていた。「伝説のキャプテン」と言われた名選手だった。いつだったか、川淵さんに会った時、「あの人がどのくらい練習をした人

はいない。工藤監督との縁で中央から早稲田に移った人だった。自分が早稲田に入った時は4年生で寮ではずいぶんお世話になった。選手生活も長かったが、いつまでも若いプレーをした人だ」と解説をしてくれた。こうした素晴らしい先輩がいたために、早稲田のエース二人が揃って古河電工に入ったのだと思った。

大学を卒業して長い間、川淵三郎さんの名前を聞かなかったが、ある年の「早稲田スポーツ OB 総会」の席上、松井が川淵さんの話をした。松井と自分は共に30歳代の前半、卒業後6、7年の頃、松井がタイのバンコク、自分が香港にそれぞれ赴任した。二人とも満足に英語ができずに苦しんだ時代である。松井が言うには、ある年、サッカーの全日本チームが遠征でバンコクに来たという。「早稲田スポーツ」時代に編集長兼サッカー担当をしていた松井は川淵さんと親しくなっていた。日本チームの一員としてバンコクに来た川淵さんを歓待したのは言うまでもない。もちろん、その一員に宮本征勝さんもいた。三人で再会を楽しんだのは当然だった。松井はこのバンコクの再会以来、川淵さんとの交友を深め個人的な付き合いにまで発展したと言う。その後、機会ある毎に松井は「川淵さんと一緒に飯を食うか、ゴルフをやろう」言っていた。しかし、川淵さんがJリーグで多忙を極めたことや松井の岐阜の会社への転職もあり、実現しないまま時は過ぎ、松井の病死によって、再会は幻となった。

自分にも川淵さんに関わる話がある。福岡へ赴任する前のことである。社内では、日本サッカー協会傘下に新しくできるプロリーグ、つまりJリーグのスポンサーになるとの話が広まっていた。Jリーグのことは連日マスコミでも大きく報じられていた。社内情報を整理すると、要は大手広告エージェンツからの持ち込み案件であることが分かった。会社のトップは常に時代に先駆けた新しい案件を好む人であったので、Jリーグのスポンサーについてもすんなりと理解されたのかもしれない。この件も単なる広告と違って、サッカーファンの多くを自社の顧客対象にできると見抜いていたのである。Jリーグ側でも新しく発足するリーグには強力なスポンサーが不可欠だと思っていたのだ。

こうした経緯があって、自分は「早稲田スポーツ」の草創期に会って以来、会うことがなかった川淵さんに会いに行こうと決めた。自分が直接かかわった案件ではなかったが、Jリーグのスポンサーになることは新規事業開発担当者としても無縁なことではないと直感したからである。

川淵さんを訪ねた時のJリーグ事務所はJR神田駅西口にあった。駅からすぐの所の小さなビルの2階だった。川淵さんは明るい笑顔で迎えてくれた。川淵さんは古河電工の現役プレーヤーを経て監督もやり日本代表監督もやった。その後、長期にわたり日本サッカー協会に身を置いてサッカー発展の仕事をしていた。もちろん、会社の仕事にも懸命に励

んでいた。これが、ざっと川淵さんから聞いた大学卒業後の話である。世界のサッカーを見るにつけ、日本サッカーをどうにかしなければ、との強い思いに駆られていたという。新たな形のサッカー界を作り上げることが急務だと決意して、Ｊリーグの発足に踏み切ったのだとも言った。数十分にわたって、川淵節を聞いた。並々ならぬ決意が声と顔に溢れていた。「君がニコスに勤めているとは思わなかった。ニコスがＪリーグ初のスポンサーになってくれるのは非常にありがたい。こうして君と会えるのも不思議な縁かもしれない。早稲田スポーツ新聞が相変わらず健在であるのも嬉しいことだ」と、喜んでくれた。

その後、Ｊリーグが無難にスタートした頃、川淵さんが会社のトップを訪ねてやってきた。急なアポイントだったらしく、自分は所用で外出している時だった。同席した会社の担当役員が言うには、川淵さんは、会社のトップにスポンサーの礼を言うと同時に「早稲田スポーツ」の話や、自分との関わり合いなども話したと言う。帰りがけに自著と色紙を自分宛てに置いて帰ったという。色紙には「継続は力なり　Ｊリーグチェアマン川淵三郎」とあった。Ｊリーグは日を増すにつれ人気上がり、スポンサーとしての会社の名前も広範囲に知られるようになった。当時のＪリーグは前期・後期の２シーズン制で試合が行われ、一方が「サントリーカップ」もう一つが「ニコスカップ」と命名され、それぞれのカップの争奪戦だった。Ｊリーグの試合場のフェンスには「ニコス」の広告が貼られた。このＪリーグスポンサーになったお蔭で、自分もＪリーグの試合を見るようになった。会社が多くの入場券を買っていたのである。国際的な大試合を見ることもあった。平成９（１９９７）年９月の日韓定期戦がそれである。日韓戦はとにかく大人気で、試合場の国立競技場も満員の大盛況だった。会社に招待券が何枚か届き、自分にも回ってきた。該当の席は、特別に良い席でスタンド正面の中段にあった。両サイドの選手の動きが良く分かる席だった。目の前が特別室で、サッカー界の大物と言われる人が何人か座っていた。サッカー界のプリンス釜本は目の前にいた。釜本は数年後輩に当たり、直接話をしたことはなかったので、特に声をかけることもしなかった。サッカーの国際試合が国立競技場を満員にするほどの力をすでに持っていたのである。試合は、前半日本が好調に押していたが、後半になって怪しくなり、最後の最後にゴールされ１－２で逆転負けを喫した。大観衆の悲痛な声を聞くのは寂しいことだった。

Ｊリーグはますます盛況になり、日本のサッカーも強くなってきた。日本代表の試合をテレビで良く見るが、この裏には川淵三郎さんの大変な努力があったのは言うまでもない。そんな時、「早稲田スポーツ」は創刊５０年を迎えることになり、OB会が中心となり祝賀行事の準備を開始。創刊者である松井はすでに平成１９（２００７）年４月に病没しており、創刊当初の苦難期を知っている者は自分以外にいなかった。幸い「早稲田スポーツ」のOBにはプロの物書きが多く、彼らが中心となって、創刊５０年の記念誌発行の準

備も始まった。もちろん、自分が覚えている創刊期の様々な出来事、それもかなり細かいことも含めて情報提供を行った。立派な「早稲田スポーツの 50 年」（新書版・448 頁）が平成 21（2009）年 11 月、記念祝賀大パーティの前に完成した。草創期を含めた半世紀の記録が出来上がったのである。

OB 会では並行して創刊 50 周年の記念大パーティの開催に向けて準備に入った。会場は早くから大学隣接の「リーガロイヤルホテル東京」を予定した。この時、肝心のパーティの主賓を誰にするかで具体的な議論をした。当然出た名前は現総長、元総長らの名前である。同時に出たのがサッカーの川淵三郎さんの名前であった。折から J リーグが燃え上がり、サッカーブームとも言える状況にあった。川淵さんと呼ばいたいとの声が多く、主賓として呼ぶことがすんなり決まった。川淵さん招聘依頼が自分の役目となった。創刊期から「早稲田スポーツ」を良く知る川淵さんは当然主賓となる資格を十分に持つ人だった。

日本サッカー協会の本部事務所は文京区湯島の元三洋電機東京本社ビル跡に移っていた。川淵さんが言うには、ビルをそっくり買い取ったのだという。この頃、自分はすでに会社を退職していて「毎日が日曜日」生活を送っていた。当然、アポイントを取って、湯島の日本サッカー協会へ出かけた。「早稲田スポーツ」OB 会長・岡部宏も同行した。川淵さんに会うのは会社在职中に J リーグのスポンサー引き受けた時以来だった。川淵さんは平成 20（2008）年に日本サッカー協会会長を退任し名誉会長に就任していた。サッカー協会本部ビルの上層階にあった名誉会長室へ案内され、二人で待っていると、間もなく川淵さんが現われた。「久しぶり、その節はありがとう、今は何をしているの」と数年ぶりの再会も笑顔だった。川淵さんが言った「その節」とは J リーグ発足時にスポンサーとなった会社への謝辞だった。岡部と自分の二人で「早稲田スポーツ」が創刊 50 周年を迎えるので、パーティを開くことにした。ついては創刊期から新聞を良く知っている川淵さんを主賓として迎えたい」と、訪問の趣旨を説明した。しばらく手帳を見てから「大丈夫だ、必ず出席する」と明確な返事が返ってきた。「松井が存命なら、お願いに来るのは彼の役割だが、すでに亡くなったので自分が代役として来た」という話もした。川淵さんは、一瞬顔を曇らせ、松井の早い鬼籍入りを惜しんだ。これを契機に、名誉会長室では早稲田の昔話や現在のサッカー界の話、早稲田サッカー部の話に花が咲いた。

「早稲田スポーツ創刊 50 周年記念パーティ」は平成 21（2009）年 11 月 14 日、早稲田のリーガロイヤルホテルで開催した。川淵さんはいつもの笑顔で、リーガロイヤルの会場に現われた。パーティ最初の挨拶をお願いした、川淵さんは「早稲田スポーツ」創刊期の状況を始め、早稲田にとってスポーツ新聞がいかに有効なものであるかを説くように話をした。さらに松井がバンコク在勤中、サッカー日本チームがバンコクへ行き、松井には一

方ならぬ世話になったという話も挿入して、参会者一同を喜ばせた。いかにも川淵さんらしいユーモアたっぷりのスピーチは聞くものを飽きさせなかった。